

コーピングが夫婦関係満足度に与える影響に対する コミュニケーションスキルの調整効果の検討

山 岸 翼

コーピングが夫婦関係満足度に与える影響に対する コミュニケーションスキルの調整効果の検討

山 岸 翼

目 次

はじめに	
第Ⅰ章 背景	
第1節 家族発達と夫婦関係	
第2節 夫婦関係に関する先行研究	
第3節 夫婦間葛藤と葛藤対処としてのストレスコーピング	
第4節 夫婦のコミュニケーションに関する先行研究	
第5節 コミュニケーションスキルの定義	
第6節 コミュニケーションスキルとストレスコーピングに関する先行研究	
第Ⅱ章 目的と仮説	
第1節 目的	
第2節 仮説	
第Ⅲ章 方法	
第1節 調査対象者	
第2節 調査手続き	
第3節 調査内容	
第4節 分析方法	
第Ⅳ章 結果	
第1節 デモグラフィックデータ	
第2節 因子分析	
第3節 t 検定・分散分析	
第4節 相関分析	
第5節 階層的重回帰分析	
第Ⅴ章 考察	
第1節 調査協力者の特徴	

第2節 デモグラフィックデータと各尺度 (夫婦関係満足・関係焦点型コーピング・コミュニケーションスキル)	
第3節 関係焦点型コーピングとENDCOREs	
第4節 夫婦関係満足に影響を及ぼす要因	
第Ⅵ章 本研究のまとめ	
第Ⅶ章 本研究の限界点と今後の展望	

はじめに

全ての家族は発達するものであり、その家族発達の各段階で全ての家族成員に適応と変化を求める新しい問題があるとされている(岡堂, 1999)。各発達段階で生じる問題に取り組み、再組織化することで家族の安定性が増すとされているが(岡堂, 1999)、問題に取り組んでいく中で夫婦の間で意見が対立するなどの葛藤が生じる。そして、夫婦は問題やそれに伴って生じる葛藤への対処が困難となったとき、離婚という選択肢を考える。内閣府男女共同参画局(2022)によれば、日本の結婚・離婚・再婚の現状として、最も婚姻件数が多かった1970年の約103万件から2000年に減少傾向に転じ、近年(2015年～2019年)の婚姻件数は約60万件で推移している。また、同研究で婚姻件数には初婚件数と再婚件数の両方が含まれており、婚姻件数を占める再婚件数の割合は2000年で20%台、2005年以降は約25%で、婚姻の4件に1件が再婚であることが明らかとなっている。一方、近年の離婚件数は、1970年の9.6万件か

ら徐々に増加傾向を示し、2000年で26.4万件まで増加したところから、近年では約20万件で減少傾向を示し、婚姻件数の約3分の1となっている（内閣府男女共同参画局，2022）。これらのことから、2000年を境に婚姻・離婚件数ともに減少傾向であることが明らかになっている。

こうした統計上の推移がみられる要因の1つとして、時代や文化によってもたらされた家族のかたちの変化が挙げられる（内閣府男女共同参画局，2022；長津，1996；落合，2019）。従来家族は選択不可能・解消困難と捉えられてきたが、現代社会では家族の「選択可能性の拡大」という意味で個人化が浸透してきている（山田，2004）。近年の日本における離婚観を肯定する考え方も、1992年と比較して2005年の調査では割合が増加しており、離婚をすることを「自分の生き方を大切にするようになったことの反映である」と捉えている割合が特に増加していた（厚生労働省，2013）。すなわち、夫婦それぞれが自己実現を求める風潮や、夫婦を離婚によって終わらせてはいけないという倫理的規範の崩壊などの諸要因が、夫婦関係に不可避的な葛藤や不和の克服を促すよりも離婚を動機付けていると考えられる（岡堂，2006）。

一方で、離婚によって様々な問題が生じることも指摘されている。例えば、身体面では特に女性の場合、離婚者の死亡率は結婚中の人の3倍強、男性の場合についても2倍以上といわれ、死因にはがんや糖尿病、脳卒中などの生活習慣病によるものもあるとされている（Argyle & Henderson, 1985 大坪訳 1992）。また、精神面においても、離婚によって社会的ネットワークを失うことで、自分は社会の外にいて、社会の中で劣っている存在であると感じたり、生活が無意味なもののように感じたりなど、強い孤独感や抑うつ感を持つことが指摘されている（Argyle & Henderson, 1985 大坪訳 1992）。

さらに、離婚による影響は当事者である夫婦だけでなく、子どもにも及ぼされる。子どもの場合にも、離婚時の状況や場合によっては、頭

痛や腹痛、気分の悪さ、学校への不適応などの問題を呈するなど（棚瀬，2004）、深刻な精神的・身体的影響を与える可能性がある。また、直原・安藤（2020）によれば、別居後・離婚後の夫婦間の葛藤は、子どもがその葛藤を受け止めることで心理的苦痛が生じ、子どもの抑うつや不安といった適応の側面に影響を与えるという。離婚する前においても、家庭内で生じた夫婦間の葛藤が子どもの心理的問題に大きく関与していることが指摘されている（野口，2013）。すなわち、離婚は当事者だけでなくその子どもにも影響を及ぼし、その影響は離婚前後の夫婦間の葛藤も含まれている。

これまで述べてきた通り、結婚・離婚の現状や家族のかたちの変化から、特に近年では我が国において離婚が稀有なことではないといえるが、先行研究から離婚によって及ぼされる影響も明らかになっている。当事者である夫婦だけでなく、子どもを含めた家族全体が健康的に機能していくためには、夫婦が家族の中心として家族の中で生じるさまざまな問題に対応し、そこで生じる葛藤に適切に対処していくことが重要であると考えられる。

ただし、言い争いやDV等の深刻な夫婦間での問題や葛藤がみられる場合には、夫婦も子ども離婚が救済となる場合もあることが考えられる。離婚に対する子どもたちの反応は単純なものではなく複雑で、離婚の際の状況や条件によって与える影響もさまざまである（棚瀬，2004）。これらから、離婚が必ずしも当事者やその子どもに対して悪影響を与えるものではないということも踏まえておく必要がある。

第I章 背景

第1節 家族発達と夫婦関係

夫婦となってから全ての家族は、一定の諸段階を経過して発達とされている（岡堂，1999）。また、岡堂（1999）によれば、家族発達の各段階においてその段階固有の生活現象があり、全ての家族成員に適応と変化が求められるような

問題が生じるとされている。さらに、岡堂（1999）は、家族発達段階論のモデルを批判的に参照しながら、臨床的に妥当と考えられる6段階の家族発達段階モデルを記述している（Table 1）。

このモデルにおける新婚期とは、婚礼から第1子の誕生までの時期を指している（岡堂，1999）。令和元年の女性の平均初婚年齢が29.6歳、第1子出生時の平均年齢が30.7歳で（厚生労働省，2021）、現在の日本女性は結婚してから約1年前後で妊娠・第1子を出生していることが明らかになっている。妊娠中の夫婦を対象

とした岩尾・斎藤（2012）の研究で、妻における夫婦関係の良好さには、夫が自分を理解してくれるといった受容や、夫が現時点で家事を積極的に手伝ってくれている、精神的な支えとなっているといった夫の支援・信頼などが関連している要因として示された（ $r = .578 \sim .668$, $p < .01$ ）。一方、同研究における夫では妻が自分を理解してくれるといった受容以外に、出産・育児に対する期待や楽しみなどの肯定的感情が夫婦関係の良好さに関連することが示された（ $r = .410 \sim .488$, $p < .01$ ）。これらの結果から、岩尾・斎藤（2012）は妊娠期の夫婦におい

Table 1 家族発達段階の課題

発達段階	主要課題	典型的な問題
【第1段階】 新婚期	カップルとして十分に機能するための基本的なルールとパターンを築き上げる必要がある。	発達の前段階で未解決だった問題を新婚生活に持ち込んでいる。
【第2段階】 出産・育児期	夫には父親の役割、妻には母親の役割が期待される。	夫婦の会話や親しい交わり、性関係などの減少に伴う不満も少なくない。夫婦の一方が子どもと関わりすぎること夫婦関係を無視する。
【第3段階】 子どもが学童期の時期	子どもの自立性と家族への所属感・忠誠心とのバランスが適切であるように努める必要がある。	専業主婦の中では親としての役割喪失から心理的な不適応を示す。子どもは家族システムの病理を問題行動で訴える場合がある。
【第4段階】 子どもが10代の時期	親子関係を、特に自立と責任と制御の面で、基本的な信頼関係を損なわずに再規定する。	家族への依存と自立の葛藤による10代の子どもの反抗。落ち着いた行動は、親から自立したい衝動と、子どもでいたい願望、親から良い子と思われたい気持ちの葛藤から生じる。
【第5段階】 子どもが巣立つ時期	親子の絆を断つことなく、親子が分離すること。分離に伴う喪失感。	親子の分離が健全に進まないことから生じる問題。
【第6段階】 加齢と配偶者の死の時期	これまでに築きあげた信頼関係を損なうことなく、これらの喪失経験を受容すること。定年退職した親は充実感や自尊心を失い始める。	親の病気、死亡。それに伴う残された家族の不安、うつ状態、喪失による悲哀感。

て、良好な関係性を維持するための要因や各々のニードが妻と夫で異なっており、そのことをお互いに理解することが重要であると述べている。

次に、第2段階の出産・育児期では、夫には父親の役割、妻には母親の役割が期待され、夫婦の会話や親しい交わり、性関係などの減少に伴う不満も少なくないという問題が生じる（岡堂, 1999）。類似する知見として、小野寺（2005）は68組の夫婦に縦断研究を行い、妻と夫のどちらも、親になる前と比較して親になって2年後・親になって3年後では、夫婦間の親密な感情が低くなるといった結果を明らかにした（妻： $F = 15.96$, 夫： $F = 8.40$, $p < .001$ ）。さらに、妻の夫に対する親密性を下げている要因には「子どもの育てやすさ」が関係していたことも明らかにしている（ $\beta = .368$, $p < .05$ ）。小野寺（2005）はこの結果について、子育てに時間が取られ苦労が多くなることで、夫に対する関心が減少する可能性を示唆している。一方、同研究の夫の妻への親密性の低下得点に、妻自身が認知している「子育てに対すイライラ」が負の影響を与えていることが明らかになっており（ $\beta = .307$, $p < .05$ ）、子どもの誕生が夫婦の親密性に大きな影響を与えていることが示唆されている。梅田・島谷・長沼（2016）の先行研究においても、妻は「家事をする時間」、「家事や育児などに対する配偶者の協力」、「配偶者と過ごす時間」について、重要度が高いと意識しているながらも充足度が低いと認識している傾向があることを報告しており、妻側において夫婦関係に不満を抱えやすいことを指摘している。

その後、夫婦は子どもが児童期まで発達すると、モデルにおける第3段階に入る。子どもは家族システムの病理を問題行動で訴える場合があるとされる（岡堂, 1999）。児童期の子どもの抑うつ傾向についての先行研究では、抑うつ得点低群の子どもと比べて、抑うつ得点高群の子どもの方が、家族間の情緒的絆を表す凝集性の得点が低いことが明らかになっている（菅原ら, 2002）。さらに同論文における家族の凝集性や家庭のあたたかさは、夫から妻へ、妻か

ら夫への愛情といった愛情得点からの影響を受けており（菅原ら, 2002）、夫婦関係のみならず、子どもを含めた家族全体を機能させる上で夫婦関係の良好さは重要であることが示唆されている。

第4段階では子どもが10代の時期で、家族への依存と自立の葛藤による10代の子どもの反抗が主要課題となる（岡堂, 1999）。精神的自立の時期の子どもはその過程の中で心理的にアンバランスな状態となることが考えられ（白井, 1997）、家族機能の不全是過敏性腸症候群や過呼吸症候群、潰瘍性大腸炎などの心身症の発症にも影響を及ぼすとされている（増田ら, 2004）。また、心理的な側面に与える影響として、特に女子において夫婦間の葛藤が強いほど夫婦関係に巻き込まれやすく自尊心が低くなることが明らかになっている（山本・伊藤, 2012）。

さらに、子どもが青年期後期以降になると、第5段階の子どもが巣立つ時期に入る。この時期の主要課題は、親子の分離が健全に進まないことによって生じるとされている（岡堂, 1999）。例えば、親子の分離が進まない要因の1つに「空の巣症候群」の例が挙げられる。「空の巣症候群」とは、「夫婦と子どもで営んでいたはずの『愛の巣』が夫は仕事で留守がちとなり、子どもたちも思春期を迎えたり独り立ちするようになると、巣には主婦一人だけが残されるという虚ろな体験をする」という現象である（厚生労働省, 1997）。このような体験によって、抑うつ感や動悸などの身体症状がみられることもある（厚生労働省, 1997）。子供が10代の時期の女性を焦点に当てた後山（2002）による先行研究では、母親役割の終了という対象喪失体験による喪の作業の失敗とアイデンティティの混乱が空の巣症候群を引き起こすとされている。この分離の問題と「空の巣症候群」は密接に関係していることが考えられ、この時期に発現しやすい現象であると考えられる。

最後に、家族発達の第6段階は加齢と配偶者の死の時期であるとされている。定年退職をす

る年齢を迎えて夫婦は充実感や自尊心を失いやすく、様々な喪失経験を受容することが主要課題となる。伊藤・相良（2012）は、夫の定年退職前後である中年期から高齢期の夫婦を対象にした夫婦関係満足の研究において、定年退職前の現役世代の妻では会話時間、共同活動、収入満足度が夫婦関係満足を高め（ $\beta = .320, .250, .280$, いずれも $p < .001$ ）、夫はこれらの変数は夫婦関係に全く寄与していなかったことを明らかにしている（ $\beta = .080, .180, .190$ ）。しかし同研究において、退職世代では夫も会話時間、共同活動といった相相互作用が夫婦関係満足を高める結果であることが報告されている（ $\beta = .270, p < .05, \beta = .250, p < .01, \beta = .270, p < .001$ ）。伊藤・相良（2012）は、この世代による変化について、稼ぎ手役割から降りることで夫側での結婚生活への期待に変化が生じていると解釈している。

上述してきた通り、夫婦は各発達段階で特徴的でさまざまな問題に直面する中で、二者間の関係性の変化が生じることが先行研究により明らかになっている。さらに、夫婦の関係性は子どもにも影響を与えるとされ、家族全体を機能させる上で夫婦関係の良好さは重要であることが示唆される。

第2節 夫婦関係に関する先行研究

夫婦関係や結婚生活の満足度を評価するものとして夫婦関係満足度や結婚満足度等の概念も複数存在している。そもそも、夫婦関係満足度や結婚満足度を規定するものとは何か。例えば、永井（2005）の29歳～49歳の有配偶者である女性を対象とした先行研究では、特定の尺度は用いらずに単一指標として「あなたは現在の夫婦関係に満足していますか」とたずね、妻の夫婦関係満足度を測定している。同研究によれば、妻の夫婦関係満足度を規定するものとして結婚初期は夫の家事・育児遂行、年数が経つにつれて夫の休日の家事・育児の遂行と稼得役割の遂行が重要となることを示唆している。すなわち、妻において夫婦関係満足度を規定する

要因は婚姻年数によって変化するものであり、夫婦関係満足度は家庭内における家事育児などの生活の状況や収入といった経済面など複数の側面から成り立っていることがうかがわれる。

こういった複数の側面を包括的に捉えるような単一指標としての測定だけでなく、これまで米国を中心にさまざまな自己記入式の尺度が開発されている（柏木・平山, 2003）。そのため、夫婦の満足度を測定する先行研究において用いられる尺度もさまざまである。例えば、黒澤・加藤（2013）の子育て期の夫婦を対象に行われた先行研究では、Kansas Marital Satisfaction Scale（Schumm *et al.*, 1986）の日本語版（菅原・詫摩, 1997）が用いられている。この尺度は「あなたの結婚にどのくらい満足していますか?」「配偶者としてのあなたの夫（妻）にどのくらい満足していますか?」「あなたの夫（妻）との関係にどのくらい満足していますか?」の3項目で構成されており（梶井ら, 2023）、夫婦の結婚の満足度を測定している。また、伊藤・相良（2012）は中高年期夫婦を対象とした愛情尺度の作成をしており、「悩み事や相談があるとき、配偶者は親身になって一緒に考えてくれる」、「配偶者は私を理解してくれる」などの夫婦間の愛情に特化した尺度も存在する。他にも、Norton（1983）のQuality Marriage Index（以下：QMI）は諸井（1996）によって日本語訳され、6項目で現在の夫婦関係全体の満足度を評価する「夫婦関係満足」尺度として知られる1次元の尺度がある。これらは一部であるが、以上のように夫婦の関係や結婚生活の満足度を評価する尺度や夫婦の一側面に特化した尺度など、さまざまな尺度が存在している。

その中で本研究では、Norton（1983）のQMIを諸井（1996）が日本語訳した「夫婦関係満足」を用いる。本尺度は「私たちは、申し分のない結婚生活を送っている。」「私と夫（妻）の関係は、ひじょうに安定している。」「私たちの夫婦関係は、強固である。」などの6項目から夫婦関係の満足度を測定している。複数の因子によって構成されている尺度と比較すると夫婦の

関係の良さに関する1次元の尺度で、非常に単純な構造となっている。本研究で「夫婦関係満足」を使用する意義として、次項で述べる関係焦点型コーピングが夫婦の関係維持を目的としたコーピングであることから、夫婦の関係の良さに特化した尺度を用いることが適していると考えられる。また、同様に次節以降で述べるコミュニケーションスキルの概念において使用する尺度の因子数が多く、重回帰分析に必要な最低限の対象者数（解析に使用する独立変数×10；本研究の場合10個の独立変数のため、100名以上の対象者が必要であると予測される）を考慮すると1次元尺度である「夫婦関係満足」を変数として用いることが望ましいと考えられる。

第3節 夫婦間葛藤と葛藤対処としてのストレスコーピング

第1節で述べた通り、夫婦は各発達段階で様々な問題に直面することが明らかとなっている。夫婦が家族の中心としてそれらの問題に対処していく中で、相手と意見が対立したり、食い違ったり、相手の言動に対して不満に感じたりすることがあるだろう。些細なことから争いになることもあり、ふくれっ面をしたり、口論をしたり、時には身体的な暴力となる場合もあり（岡堂, 2006）、夫婦という関係性は葛藤が生じやすいことが示唆される。このような夫婦間葛藤は、深刻化すれば関係の危機となることも考えられ、Argyle & Henderson（1985 森永訳 1992）は、葛藤が生じた原因の問題への直面を避けることは緊張を高め、関係改善の機会を失うことになると指摘している。これらのことから、夫婦間葛藤を適切に対処することは関係性の改善において必要と考えられる。

このような夫婦間葛藤は対人ストレスイベントであり、ストレス要因の1つとされていることから（橋本, 1995；橋本, 1997）、夫婦間葛藤の対処については「ストレスコーピング」が注目される概念として挙げられる。コーピングとは、ストレスに対する対処行動のことであり、①情動焦点型コーピング、②問題焦点型

コーピングの2つの分類が中心的である（加藤, 2002；Lazarus & Folkman, 1984 木明・春木・織田訳, 1991）。①は情動的な苦痛を低減させるためになされるもの、②は問題の所在を明らかにしていくことに対処への努力が向けられるものとされ、対処目的や努力する方向性がそれぞれで異なっている。

これらの2つのコーピングとは異なり、社会的関係の成立、維持、崩壊を目的とした対人調節機能に関わるコーピングである「関係焦点型コーピング」が存在する（加藤, 2002）。従来の2つのコーピングと異なり、対人・社会的相互作用が考慮されたもので（加藤, 2002）、婚姻関係を継続しながら生活している夫婦において、配偶者との関係維持を前提としたストレスコーピングが用いられていると考えられる。そのため、本研究では「関係焦点型コーピング」に着目する。

この関係焦点型コーピングは、黒澤・加藤（2013）によって尺度化されており、117名の子育てをする親を対象とした質問紙調査を行った結果、「回避的關係維持」、「積極的關係維持」、「我慢・譲歩的關係維持」の3つの因子が抽出されている。同研究では、併存的妥当性を調べるために共感性・結婚満足度・精神的健康・不快情動回避心性を測定する尺度も用いて、関係焦点型コーピングから抽出された3つの因子との相関関係も調べている。3つの因子と結婚満足度の相関分析の結果、「積極的關係維持」は結婚満足度と正の相関が示され（ $r = .34, p < .001$ ）、「回避的關係維持」は結婚満足度と負の相関が示され（ $r = -.29, p < .01$ ）、「我慢・譲歩的關係維持」と結婚満足度との間は無相関が示された（ $r = .04$ ）。

「我慢・譲歩的關係維持」は結婚満足度との間に相関が認められなかった背景として、以下のようなことが考えられる。東海林（2006）によれば、夫婦の葛藤に対して譲歩的な対処することは夫婦のような長期的関係において日常的なことで、譲歩的に対処することは労力的・時間的な制約の中での実際的な有効性があると

いうことを指摘している。さらに、東海林 (2006) は、夫婦において積極的なコーピングが望ましいとされながらも、夫婦が過ごす時間には制約があり、その中で積極的に時間をかけて意見を擦り合わせることは実際には難しいことで、積極的対処より現実的で有効性のある譲歩的対処がとられやすいと考察している。すなわち、日常的に行われる譲歩的な対処は最も負担が少なく、互いの関係性の認識も左右されにくいコーピングである可能性を示している。また、小野寺 (2005) は「親になる前」及び、「親になって2年後」、「親になって3年後」といった3つの時期における夫婦関係尺度得点の男女の比較を行っている。その結果、3つの時期全てにおいて女性よりも男性の方が「我慢」得点が高いことが明らかになっていることから (小野寺, 2005)、特に男性の方が譲歩・我慢的なストレスコーピングを取りやすいことが示唆されている。

また、黒澤・加藤 (2013) の先行研究では、関係焦点型コーピングにおける3つの因子と結婚満足度との間の相関関係までの結果であり、因果関係について確認されていない。加藤 (2001) の大学生を対象とした先行研究では、無視するようにしたなど関係を放棄・崩壊するような行動をとるネガティブな関係コーピングは友人満足感に負の影響を与え ($\beta = -.182, p < .01$)、積極的に関係を改善し、より良い関係を築こうと努力するようなポジティブな関係コーピングは友人満足感に正の影響 ($\beta = .251, p < .001$) を及ぼすことが報告されている。したがって、夫婦関係においても同様に因果関係がみられるか検討する必要があると考える。

第4節 夫婦のコミュニケーションに関する先行研究

コミュニケーションが夫婦の良好な関係維持に必要なことは、数多くの先行研究で示されている (平山・柏木, 2004; 伊藤・相良・池田, 2007; 岩尾・斎藤, 2012; 中島・常盤, 2008; 永田, 1999)。江崎グリコ株式会社 (2019)

は、夫婦の会話量や満足度について、全国の20代～60代の、配偶者と同居していて、配偶者との離婚意向のない男女1,000人を対象としたインターネット調査を行っている。同研究によれば、夫婦で必要と考える1日の会話量が80.6分とされる一方、実際の会話量の平均が62.7分で、必要と考える会話量よりも18分少ない会話量で、夫婦の現状として理想とされる会話量を十分に確保されていないことが示唆される。また、夫婦の会話量に満足していると配偶者への総合的な満足度も94.4%と高いといった結果も明らかになっており (江崎グリコ株式会社, 2019)、夫婦間のコミュニケーションにおいて量的な側面の重要性が示唆されている。

他方で、粕井 (2014) は、夫婦186組を対象に、夫婦のコミュニケーションの特徴と結婚年数による違いに関する先行研究を行っている。同研究では、夫婦関係初期群が最も共感・接近的なポジティブ傾向がみられ、結婚年数が15～29年にある夫婦はポジティブ傾向が低く、威圧や無視といったネガティブ傾向が高いという最も良くないコミュニケーション態度をとる時期であることを明らかにしている。また、平山・柏木 (2004) は、夫婦のコミュニケーション・パターンと夫婦関係満足感の関係性について研究している。同研究では、共感的で接近的態度を示す共感親和群は、ポジティブな交流もネガティブな交流も顕著にみられない中立的なコミュニケーションが行われている平均中立群よりも夫婦関係満足感が有意に高く、平均中立群は威圧的で回避的な態度を示す威圧回避群よりも夫婦関係満足感が有意に高いという結果が報告されている。すなわち、夫婦関係が長く続くほどコミュニケーションの態度やパターンはネガティブ傾向になりやすく、ネガティブな交流をしている夫婦は夫婦関係の満足感が低い傾向にあることが明らかになっている。コミュニケーションのパターンという点で、Argyle & Henderson (1985 森永訳 1992) はうまくいっていない夫婦の夫側において、非言語的コミュニケーションを使って自分の感情を伝えること

が下手であり、さらに妻の感情を正しく理解していない場合が多いということを述べている。以上のことから、夫婦関係が良好に維持されるために、夫婦間のコミュニケーションにおける態度や、非言語で伝えること・非言語を理解することなどの質的な側面も重要であると考えられる。

これらのような夫婦間のコミュニケーションの質的な側面の中で、本研究では夫婦のコミュニケーションスキルに着目する。永田（1999）の夫婦とコミュニケーションスキルの関係性に関する先行研究によれば、夫婦相互の、言いたいことは何でも言える雰囲気や話題を飛ばさずにまとまった話ができることなどといった、話し合いを発展させるような会話能力（会話スキル）が良好な夫婦関係を維持する要因の1つとなっていることを示している。第3節で述べた通り、夫婦間で生じた葛藤を積極的なコーピングで対処することが望ましいとされながらも、労力的・時間的な制約の中では譲歩的な対処がとられやすいということから（東海林，2006），夫婦が限りのある時間の中でお互いが必要なことを話すためには、コミュニケーションスキルが必要と考える。他にも、コミュニケーションスキルの有無によって選択されやすいストレスコーピングの種類が変化する可能性や、黒澤・加藤（2013）による先行研究では確認されなかった我慢・譲歩的なコーピングと夫婦の満足度との間の関係性に変化が生じる可能性も考えられる。

また、伊藤・相良・池田（2007）の先行研究では、配偶者への自己開示とコミュニケーションスキルとの間に正の相関関係が示され、スキルが開示を促しており、この両者の関係が子育て期よりも中年期の夫婦で高かった（伊藤・相良・池田，2007）。さらに、自己開示が夫婦関係満足度に影響を与えており（伊藤・相良・池田，2007），ライフステージが進むにつれて関係満足度が低下していく夫婦関係の性質があるにも関わらず（伊藤，2015），コミュニケーションスキルによって自己開示が促されたことで子育て

期よりも中年期夫婦の方において満足度が高いことを明らかにしている（伊藤・相良・池田，2007）。長期的に夫婦関係を良好に維持していく方法を考えるためにも、コミュニケーションスキルは重要な概念の1つと考える。

第5節 コミュニケーションスキルの定義

上述の通り、夫婦の満足度とコーピングの関係性に影響を与える要因として、コミュニケーションスキルが考えられる。コミュニケーションスキルとは、対人関係におけるコミュニケーションを円滑に行うために必要となるものである（藤本・大坊，2007）。大坊（2003）は、現代のコミュニケーションの状況について“コミュニケーション不全”と表し、以前にも増して適応的な関係の構築・維持には“意図的な努力”が必要あることを指摘している。対人関係を適応的に運営していくために社会的スキルが必要であり、相川（2009）は、社会的スキルを、テニスやピアノといった運動スキルと同様で、生まれた後に練習をして上手になっていく「技術」であると説明している。このことから、スキルとは学習可能なものという特徴を持っているといえる。

スキルと名前のつく概念は複数存在しており、例えばコミュニケーションスキルやアサーションスキル、ソーシャルスキルなどがある（藤本，2013）。どのスキルも対人関係に関するものであり、これらを測定する尺度も数多く存在する。藤本・大坊（2007）はこのように複数ある対人コミュニケーションに関するスキルの尺度を包括的に検討し、コミュニケーションスキルに関する定義づけとモデリングを行い、扇形のようにになっているENDCOREモデルを作成している（Figure 1）。このモデルにおいてコミュニケーションスキルとは、自己を基盤とし、対人関係、社会へ拡大していくものとする扇の要であり、最も基礎的なスキルとして位置づけられている（藤本・大坊，2007）。

大坊（2006）は、適切な対人的行動の基礎には、自分のメッセージを適切に表出すること

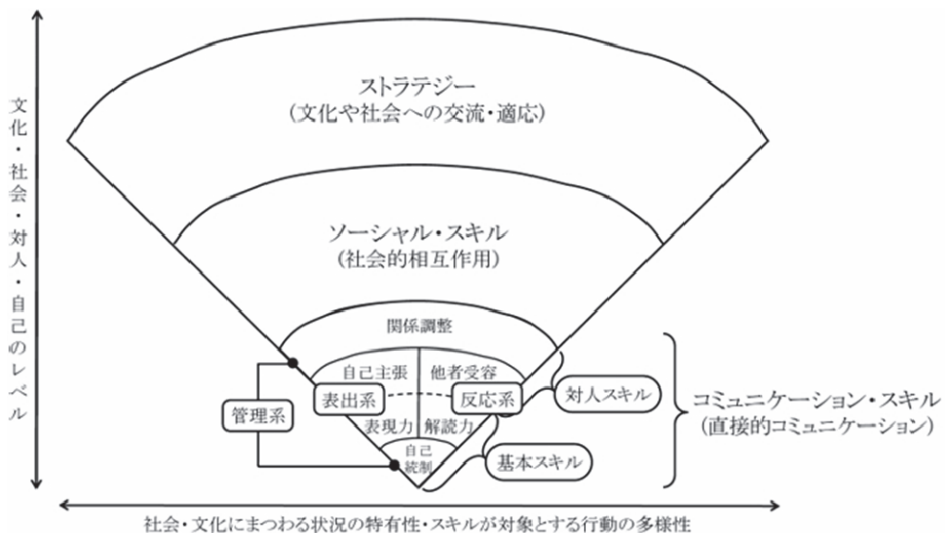


Figure 1 “スキルの扇” (藤本・大坊, 2007, p. 348, Figure 1)

(記号化), 他者のメッセージを的確に把握できること(解説)が求められているという。藤本・大坊(2007)のENDCOREモデルにおけるコミュニケーションスキルについて「表出系」(表現力・自己主張)と「反応系」(解読力・他者受容)が含まれているように, 大坊(2006)が示した概念と類似している。以上のことから, コミュニケーションスキルとは対人間のコミュニケーションに直接関わる個人が持つ最も基礎的なスキルであると捉えられる。本研究では夫婦が個人で持つコミュニケーションスキルに注目するため, 藤本・大坊(2007)によって提唱されたENDCOREモデルを採用する。

第6節 コミュニケーションスキルとストレスコーピングに関する先行研究

相川(2009)は, コミュニケーションスキルを含む社会的スキルが不足していると対人場面において稚拙な対人反応として表出しやすく, 自ら他者との相互作用を否定的なものにし, 摩擦や葛藤を起こしやすい人との関わりを避けるようになると述べている。町田(2009)は大学生180名を対象とした質問紙調査では, 「相手志向性」, 「外向性」, 「表出」の3因子が構成さ

れるコミュニケーション能力と対人ストレス遭遇頻度との相関関係を明らかにしている。その結果, コミュニケーション能力の「相手志向性」, 「外向性」の2因子と対人ストレスの中における「対人葛藤」との間で負の相関がみられている ($r = -.171, p < .05; r = -.211, p < .01$)。すなわち, スキルが不足している人ほど, 対人葛藤によるストレスが生じやすいことが考えられる。

益子(2013)は大学生429名を対象に質問紙調査を行っており, 社会的スキルと「自他双方が満足できる葛藤解決を目指す『統合的葛藤解決スキル』」の中の4因子全てとの間で正の相関があることを報告している ($r = .26 \sim .55$, いずれも $p < .001$)。この結果には, 藤本(2013)によるコミュニケーションスキルENDCOREsの最適化モデルが背景として存在することが考えられる。藤本(2013)はENDCOREsの最適化モデルの検討のため, ENDCOREsの諸因子の関係性についてAMOSを用いて評価している。その結果, コミュニケーションスキルが対人葛藤マネジメントと対人関係マネジメントに影響を与えるような関係となっており (GFI = .984, AGFI = .943, CFI = .973, RMSEA

= .082), 対人葛藤を円滑に対処すること・良好な対人関係を維持することに、コミュニケーションスキルの必要性を示唆している。

以上のことから、コミュニケーションスキルが高いほど対人葛藤によるストレスに遭遇する頻度が低く、ストレスが生じた際に適切なコーピングがされやすく、良好な関係性を維持しやすいことが明らかになっている。第3節で述べたように、ストレスコーピングの各種類と夫婦関係の満足との間で相関がみられていることから、コミュニケーションスキルによって夫婦間葛藤におけるストレスコーピングと夫婦関係の満足の関係性が変化する可能性が推測される。しかし、本節で紹介した先行研究も含め、コミュニケーションスキルの尺度を用いた調査では大学生対象が多く、対人関係の満足度(?)についても夫婦関係満足を扱った先行研究が確認されていない。

第Ⅱ章 目的と仮説

第1節 目的

上述してきた通り、家族全体を機能させる上で夫婦関係の良好さは重要であることが示唆されているが、夫婦は家族の中心として家族の発達段階におけるさまざまな問題に直面するため、夫婦間で葛藤が生じやすい関係性であると考えられる。このような夫婦間葛藤は対人ストレスイベントであり、ストレス要因の1つであることから(橋本, 1995; 橋本, 1997), 夫婦間葛藤の対処については「ストレスコーピング」の概念が注目される。黒澤・加藤(2013)による先行研究から、ストレスコーピングと夫婦の満足度との間の関係性が明らかになっているが、コミュニケーションスキルの有無によってその関係性に変化が生じることが推測される。しかし、コミュニケーションスキルの尺度を用いた調査では大学生対象が多く、対人関係の満足についても夫婦関係満足度を扱った先行研究が確認されていない。以上のことから本研究では、ストレスコーピングが夫婦関係満足度

に与える影響を、コミュニケーションスキルが調整するかどうかを検討する。

第2節 仮説

1. 「積極的關係維持」が「夫婦関係満足」に与える影響をコミュニケーションスキルが促進する。
2. 「回避的關係維持」が「夫婦関係満足」に与える影響をコミュニケーションスキルが緩衝する。
3. 「我慢・譲歩的關係維持」が「夫婦関係満足」に与える影響をコミュニケーションスキルが促進する。

第Ⅲ章 方法

第1節 調査対象者

本研究では、18歳から65歳の既婚者を対象とした。包含基準は18歳以上、65歳以下、民法上の手続きを経て結婚している既婚者、再婚している既婚者とした。除外基準は18歳以下、65歳以上、相手との関係が内縁関係、現在身体症状・精神症状により診断を受けて治療中であることとした。

第2節 調査手続き

本調査は、2023年6月～10月に実施された。質問用紙で回答する方法とGoogleフォームで回答する方法の2通りを用意し、縁故法で行った。調査協力者が回答のしやすい方法を選択できるように、2通りの方法を用意した。質問用紙で回答する場合、本調査の趣旨・方法に協力が得られた者に質問紙を配布し、同封の返信用封筒を使用して郵送するよう依頼して回収する計画を立てた。Googleフォームで回答の場合、冒頭に本調査の趣旨・方法について明記し、調査協力に同意した者のみが質問に回答できるように設定した。

いずれの方法においても、説明文に、無記名で回収する為回答者個人が特定できる情報は調査者には一切開示されないこと、調査協力は自

由意志に基づくこと、回答を断った場合でも不利益のないこと、結果の公表、調査で得た情報は研究のみに使用すること、研究終了後に調査者の責任において処分すること、および調査用紙投函後またはフォーム送信後の研究参加の撤回はできないことを明記した。

本研究は、東京国際大学学術研究倫理審査委員会の審査にて、承認番号 235602 で倫理基準を満たした研究計画であるとして承認されて実施された。

第3節 調査内容

(1) デモグラフィックデータ

年齢・性別・離婚歴・子どもの有無・末子の年齢・就業形態・学歴・婚姻年数・1日の会話時間（夫婦で休みが合う日・合わない日の各1日）

(2) 夫婦関係満足尺度6項目（諸井, 1996）

夫婦関係満足度とは、ノートン（1983）による夫婦の関係全体の良さを測定する概念である（片山, 2001）。本研究で使用する使用する尺度は、ノートン（1983）によって作成された尺度を諸井（1996）が翻訳したもので、夫婦関係の満足度について当人が回答する1次元の尺度である（片山, 2001）。

(3) 関係焦点型コーピング尺度17項目（黒澤・加藤, 2013）

関係性の維持に焦点が当てられたストレスコーピングで、子育てをする親を対象に、夫婦間のストレス場面におけるコーピングを測定する為に作成された尺度である（黒澤・加藤, 2013）。関係焦点型コーピング尺度は、「積極的關係維持」、「回避的關係維持」、「我慢・譲歩的關係維持」の3つのコーピングが抽出されている（黒澤・加藤, 2013）。夫婦間のストレス場面において、「積極的關係維持」は配偶者と積極的に関わるコーピング、「回避的關係維持」は問題について配偶者と関わらないようなコーピング、「我慢・譲歩的關係維持」は自分の意見や気持ちを抑えるようなコーピングである。

(4) ENDCOREs 24項目（藤本・大坊, 2007）

藤本・大坊（2007）によって提唱された「言

語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力」と定義する。本研究で用いる尺度であるコミュニケーションスキルを測定するENDCOREsでは、「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6つのメインスキルに分類されており、「表現力」「自己主張」を表出系、「自己統制」「関係調整」を管理系、「他者受容」「解読力」を反応系とまとめて3系統に整理されている（藤本・大坊, 2007；藤本, 2013）。

先行研究と本研究における調査対象者の属性が異なることで、先行研究とは異なる因子構造になる可能性を踏まえ、本研究で用いる3つの尺度（夫婦関係満足尺度・関係焦点型コーピング尺度・ENDCOREs）に因子分析を行う。

第4節 分析方法

社会統計学的データについては記述統計量の算出を行った。その後で、全ての尺度について因子分析を行った。その上で、各尺度と因子間の相関分析を行った。コーピングスキルが夫婦満足度に与える影響を検討するため、コーピングスキルを独立変数、夫婦満足度を従属変数とした。強制投入法による重回帰分析を行った。最後にコミュニケーションスキルの調整効果を検討するため、コーピングとコミュニケーションスキルの交互作用項を組み、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。なお、交互作用項を組むにあたってコーピングとコミュニケーションスキルの変数については中心化の処理を行った。統計解析には、IBM SPSS社の統計解析ソフトであるSPSS ver 28を使用した。

第IV章 結果

第1節 デモグラフィックデータ（Table 2）

Google フォームにて136名のデータが集計された。そのうち、回答に不備があった3名を除外し、133名（男性46名、女性87名）を分析対象とした。分析対象者の全体の平均年齢は43.2歳（ $SD = 13.1$ ）で、男性/女性の平均年齢

Table 2 分析対象者の背景

項目		男性 (n=46)			女性 (n=87)		
		平均	SD	(range)	平均	SD	(range)
年齢		44.8	13.2	(24-65)	42.1	13.0	(23-64)
末子の年齢*		15.5	10.1	(0-34)	14.7	9.4	(0-29)
		N	%		N	%	
離婚歴	なし	41	89.1		80	92.0	
	あり	5	10.9		7	8.0	
子どもの有無	なし	13	28.9		26	29.9	
	あり	33	71.7		61	70.1	
就業形態	正社員	38	82.6		43	49.4	
	自営業	6	13.0		7	8.0	
	パート・アルバイト	1	2.2		30	34.5	
	その他	1	2.2		7	8.0	
最終学歴	中学校	1	2.2		1	1.1	
	高等学校	11	23.9		16	18.4	
	専門学校	6	12.0		13	14.9	
	短期大学	1	2.2		20	23.0	
	大学	22	47.8		35	40.2	
	大学院	5	10.9		2	2.3	
婚姻年数	5年未満	13	28.3		34	39.1	
	5～10年	6	13.0		5	5.7	
	10～15年	3	6.5		6	6.9	
	15～20年	3	6.5		8	9.2	
	20年以上	21	45.7		34	39.1	
配偶者との会話時間（お休みが合う日）	ほとんどない	3	6.5		3	3.4	
	30分以下	3	6.5		6	6.9	
	30分～1時間	8	17.4		10	11.5	
	1時間～2時間	7	15.2		12	13.8	
	2時間以上	25	54.3		56	64.4	
配偶者との会話時間（お休みが合わない日）	ほとんどない	7	15.2		12	13.8	
	30分以下	6	13.0		15	17.2	
	30分～1時間	12	26.1		19	21.8	
	1時間～2時間	8	17.4		19	21.8	
	2時間以上	13	28.3		22	25.3	

*「子どもの有無」で「あり」と答えた者のみが回答。男性（n=33）、女性（n=61）

（SD）は、44.8歳（SD = 13.217）/ 42.1歳（SD = 12.985）であった。子どもがいない男性/女性は13名/26名で、子どもがいる男性/女性は33名/61名であった。子どもがいる男性/女性のうち、末子の年齢の平均は15.5歳（SD = 10.1）/14.7歳（SD = 9.4）であった。

第2節 因子分析

はじめに、夫婦関係満足尺度全6項目に対し、最尤法プロマックス回転による因子分析の結果1因子のみ抽出され、本研究においても諸井（1996）と同様で1次元の尺度であることが明らかとなった（Table 3）。

次に、関係焦点型コーピング全17項目に対し、最尤法プロマックス回転による因子分析の結果、「こんなもんだと割り切る。」の項目の負荷量が0.35以下を示した為この1項目を除外し

た。再度分析を行った結果、最終的に16項目3因子が抽出された（Table 4）。第1因子は「お互いの頭を冷やすため、話をしないようにする。」「緊張が落ち着くまで、関わり合わないようにする。」など配偶者と距離を置くような項目から成ることから、「回避的対処」と命名された。第2因子は「配偶者が何か困っているときに、話し合ってみようとする。」「配偶者をもっと理解しようとする。」など配偶者に対して積極的に関わろうとする項目から成ることから、「積極的対処」と命名された。最後に第3因子は「自分が怒りを感じても、それを打ち消したり相手に見せないようにする。」「そのことを忘れるようにする。」など、自分の気持ちや考えを抑えたり、忘れようとするような項目から成り、「我慢的対処」と命名された。黒澤・加藤（2013）による先行研究と同様の因子

構造であった。

次に、コミュニケーションスキルを測定するENDCOREsの24項目に対し、最尤法プロマックス回転を行った。「自分の衝動や欲求を抑え

る」の項目の負荷量が0.35以下を示した為この1項目を除外した。再度分析を行った結果、最終的に23項目6因子が抽出された（Table 5）。第1因子は藤本・大坊（2007）の先行研究で抽

Table 3 夫婦関係満足尺度における因子分析結果

夫婦関係満足尺度項目	因子負荷量
	1
因子1:夫婦関係満足 ($\alpha = .956$)	
私と夫（妻）の関係は、ひじょうに安定している。	0.934
夫（妻）との関係によって、私は幸福である。	0.921
私たちの夫婦関係は、強固である。	0.915
私たちは、申し分のない結婚生活を送っている。	0.890
私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う。	0.849
私は、まるで自分と夫（妻）が同じチームの一員のようであると、ほんとうに感じている。	0.813

Table 4 関係焦点型コーピング尺度における因子分析結果

関係焦点型コーピング項目	因子負荷量		
	1	2	3
因子1:回避的対処 ($\alpha = .801$)			
14. お互いの頭を冷やすため、話をしないようにする。	.777	-.390	.222
11. 緊張が落ち着くまで、関わり合わないようにする。	.709	-.225	.234
7. お互いが落ち着くまで、一人になる。	.662	-.161	.324
15. 配偶者との適度な距離を保つようにする。	.636	-.069	.162
13. 配偶者と意見がぶつからないようにする。	.574	-.196	.478
12. 配偶者が動揺しそうなことには触れない。	.486	-.092	.324
因子2:積極的対処 ($\alpha = .809$)			
10. 配偶者が何か困っているときに、話し合ってみようとする。	-.396	.785	-.170
9. 配偶者をもっと理解しようとする。	-.145	.763	-.023
4. そのことに関して、配偶者と率直に話し合ってみる。	-.354	.697	-.458
16. 配偶者にどんな気持ちか聞いてみる。	-.256	.670	-.381
1. 配偶者と口論になったら、相手の言い分を充分に聞く。	.025	.563	.002
因子3:我慢的対処 ($\alpha = .775$)			
6. 自分が怒りを感じても、それを打ち消したり相手に見せないようにする。	.202	-.145	.771
5. 自分が不安を感じても、それを打ち消したり相手に見せないようにする。	.359	-.289	.760
8. そのことを忘れるようにする。	.431	-.230	.631
3. 自分が感じている気分より、あえてもっと明るく振る舞う。	.175	.131	.598
2. 何もせず、自然の成り行きに任せる。	.189	-.239	.483
因子間相関	1	2	3
回避的対処	—		
積極的対処	-.322	—	
我慢的対処	.404	-.241	—

出された「解読力」の項目と構造が同様であった為、本研究においても「解読力」と命名された。第2因子は「会話の主導権を握って話を進める」、「自分の考えを言葉でうまく表現する」

など、言語的な主張に注目された項目から成り、「言語的主張」と命名された。第3因子は「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」、「人間関係を第一に考えて行動する」な

Table 5 ENDCOREsにおける因子分析結果

ENDCOREs項目	因子負荷量					
	1	2	3	4	5	6
因子1：解読力 ($\alpha = .917$)						
10. 相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る	.903	.378	.366	.427	.207	.390
9. 相手の考えを発言から正しく読み取る	.876	.376	.355	.485	.218	.400
11. 相手の気持ちを表情から正しく読み取る	.875	.278	.350	.413	.216	.325
12. 相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る	.784	.333	.467	.414	.290	.345
因子2：言語的主張 ($\alpha = .857$)						
13. 会話の主導権を握って話を進める	.169	.803	.144	-.062	.462	.175
5. 自分の考えを言葉でうまく表現する	.327	.796	.347	.151	.502	.314
14. まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかに	.234	.755	.013	.072	.229	.117
16. 自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する	.336	.737	.130	.180	.186	.339
15. 納得させるために相手に柔軟に対応して話を進	.510	.648	.328	.448	.218	.401
因子3：他者への関心 ($\alpha = .815$)						
22. 人間関係を良好な状態に維持するように心がけ	.287	.089	.907	.479	.319	.506
21. 人間関係を第一に考えて行動する	.294	.086	.812	.513	.381	.522
18. 友好的な態度で相手に接する	.406	.149	.697	.637	.256	.341
4. まわりの期待に応じた振る舞いをする	.292	.194	.527	.319	.330	.216
3. 善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する	.344	.248	.518	.311	.168	.224
因子4：他者受容 ($\alpha = .874$)						
20. 相手の意見や立場を尊重する	.449	.143	.534	.903	.146	.448
19. 相手の意見をできるかぎり受け入れる	.383	.148	.481	.867	.126	.440
17. 相手の意見や立場に共感する	.453	.186	.586	.754	.218	.412
因子5：非言語的主張 ($\alpha = .857$)						
7. 自分の気持ちを表情でうまく表現する	.185	.311	.399	.116	.886	.182
6. 自分の気持ちをしぐさでうまく表現する	.348	.617	.442	.226	.812	.326
8. 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	.261	.327	.322	.149	.767	.226
因子6：関係調整 ($\alpha = .775$)						
24. 感情的な対立による不和に適切に対処する	.387	.305	.464	.452	.281	.993
23. 意見の対立による不和に適切に対処する	.445	.420	.570	.467	.283	.841
2. 自分の感情をうまくコントロールする	.277	.102	.237	.398	-.116	.439
因子間相関	1	2	3	4	5	6
解読力	—					
言語的主張	.403					
他者への関心	.424	.230				
他者受容	.513	.176	.579			
非言語的主張	.239	.423	.442	.129		
関係調整	.414	.327	.520	.491	.237	

ど、他者との関わりに関する項目から成り、「他者への関心」と命名された。第4因子は、第1因子同様に、藤本・大坊（2007）と因子構造が概ね同じであったことから、本研究においても「他者受容」と命名された。第5因子は、「自分の気持ちを表情でうまく表現する」、「自分の気持ちをしぐさでうまく表現する」など、第2因子と同じ表現系のスキルであるが、非言語的な表現に注目された項目から成る為、「非言語的主張」と命名された。最後に第6因子は、「感情的な対立による不和に適切に対処する」、「意見の対立による不和に適切に対処する」など、対人間の不和に対する調整や、自分の感情を統制する項目から成ることから、「関係調整」と命名された。藤本・大坊（2007）で行われた因子分析と概ね同様の結果が得られたのは第1因子の「解読力」と第4因子の「他者受容」であり、その他の因子構造においては先行研究と異なる結果が得られた。

因子分析の結果に基づき、各因子における回答の合計をそれぞれの尺度得点とし、 α 係数の算出を行った。夫婦関係満足尺度の α 係数は.956であった。関係焦点型コーピング尺度における各因子の α 係数は、「回避的対処」が.801、「積極的対処」が.809、「我慢的対処」が.775であった。ENDCOREsにおける各因子の α 係数は、「解読力」が.917、「言語的主張」

が.857、「他者への関心」が.815、「他者受容」が.874、「非言語的主張」が.857、「関係調整」が.775であった。対象者全体における各尺度の記述統計を（Table 6）に示す。

第3節 t 検定・分散分析

はじめに、性別・離婚歴・子どもの有無の、夫婦関係満足・関係焦点型コーピング尺度・ENDCOREsの各因子得点の平均値を t 検定で比較を行った。離婚歴においていずれの因子得点にも有意差は見られなかったが、性別においては「我慢的対処」($t(131) = 4.83, p < .001$)、「関係調整」($t(131) = 2.61, p < .01$)、子どもの有無においては夫婦関係満足 ($t(131) = 4.07, p < .001$)、「積極的対処」($t(131) = 5.49, p < .001$)で有意な差があった（Table 7）。

次に、年齢・最終学歴・就業形態・婚姻年数・1日の会話時間（お休みが合う日・お休みが合わない日）を独立変数、夫婦関係満足・関係焦点型コーピング尺度・ENDCOREsの各因子得点を従属変数とした1要因分散分析を行った（Table 7）。主効果がみられた場合の多重比較は全てTukey法を採択した。

年齢は四分位で「23～28歳」、「29～46歳」、「47～54歳」、「55～65歳」とグループ分けを行った上で分散分析した結果、夫婦関係満足 ($F(3, 132) = 5.02, p < .01$)、「回避的対処」($F(3,$

Table 6 各尺度の記述統計

項目	平均値	SD	得点範囲
夫婦関係満足度	18.93	5.07	5～24
関係焦点型コーピング			
回避的対処	18.20	5.17	6～30
積極的対処	18.44	4.40	5～25
我慢的対処	13.11	4.49	5～25
ENDCOREs			
解読力	19.65	4.70	4～28
言語的主張	20.54	6.56	5～35
他者への関心	25.75	4.74	5～35
他者受容	15.14	3.30	3～21
非言語的主張	11.97	3.95	3～21
関係調整	12.90	3.55	3～21

Table 7 t 検定の結果

	性別		離婚歴		子どもの有無	
	男性 ($n=46$)	女性 ($n=87$)	t 値	なし ($n=121$)	あり ($n=12$)	t 値
夫婦関係満足	18.54(5.24)	19.14(4.99)	-0.63	19.01(4.80)	18.17(7.45)	0.38
関係焦点型コーピング	18.88(4.75)	17.79(5.36)	1.31	18.24(5.16)	17.83(5.52)	0.24
積極的対処	17.91(4.30)	18.71(4.45)	-1.01	18.40(4.43)	18.83(4.17)	-0.34
我慢的対処	15.43(3.87)	> 11.89(4.33)	4.83***	12.94(4.28)	14.83(6.25)	-1.02
ENDCOREs	19.93(5.17)	19.49(4.46)	0.49	19.50(4.74)	21.08(4.19)	-1.23
言語的主張	21.07(6.28)	20.26(6.71)	0.68	20.60(6.63)	20.00(5.94)	0.33
他者への関心	25.70(4.73)	25.78(4.77)	-0.1	25.64(4.73)	26.92(4.87)	-0.87
他者受容	15.43(3.16)	14.99(3.38)	0.76	15.17(3.33)	14.92(3.12)	0.26
非言語的主張	11.39(4.19)	12.28(3.81)	-1.19	11.88(3.93)	12.92(4.23)	-0.82
関係調整	13.93(3.11)	> 12.36(3.66)	2.61*	12.88(3.61)	13.08(3.03)	-0.21

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注. 平均値と標準偏差を示す.

132) = 5.58, $p < .01$), 「積極的対処」($F(3, 132) = 6.46$, $p < .001$), 「非言語的主張」($F(3, 132) = 2.96$, $p < .05$) で有意な差がみられた。多重比較の結果, 夫婦関係満足では「23～28歳」の者の方が, 「47～54歳」, 「55～65歳」の者よりも得点が高かった ($p < .05$; $p < .01$)。 「回避的対処」では, 「47～54歳」の者の方が, 「23～28歳」, 「29～46歳」の者よりも得点が高かった ($p < .001$; $p < .05$)。 「積極的対処」では, 「23～28歳」の者の方が, 「47～54歳」, 「55～65歳」の者よりも得点が高かった ($p < .05$; $p < .001$)。 「非言語的主張」では, 「23～28歳」の者の方が, 「47～54歳」の者よりも得点が高かった ($p < .05$)。

最終学歴では「関係調整」において有意な差がみられ ($F(5, 132) = 3.87$, $p < .01$), 多重比較の結果, 最終学歴が「専門学校」の者の方が「短期大学」の者よりも得点が高かった ($p < .001$)。

就業形態では「積極的対処」において有意な差がみられ ($F(3, 132) = 2.71$, $p < .05$), 多重比較の結果, 「正社員」の方が「パート・アルバイト」よりも得点が高かった ($p < .05$)。

婚姻年数では夫婦関係満足 ($F(4, 128) = 4.08$, $p < .01$), 「回避的対処」 ($F(4, 128) = 5.26$, $p < .001$), 「積極的対処」 ($F(4, 128) = 8.80$, $p < .001$) で有意な差がみられた。夫婦関係満足では, 婚姻年数が「5年未満」の者の方が「20年以上」の者よりも得点が高かった ($p < .01$)。 「回避的対処」では, 婚姻年数「15年以上20年未満」, 「20年以上」の者は「5年未満」の者よりも得点が高かった (いずれも $p < .001$)。 「積極的対処」では, 婚姻年数「5年未満」の者の方が, 「20年以上」の者よりも得点が高かった ($p < .001$)。

1日の会話時間 (お休みが合う日) では夫婦関係満足 ($F(4, 128) = 18.92$, $p < .001$), 「積極的対処」 ($F(4, 128) = 10.61$, $p < .001$) で有意な差がみられた。多重比較の結果, 夫婦関係満足では配偶者との会話時間が「2時間以上」の者の方が, 「ほとんどない」者よりも得点が高

く ($p < .01$), 「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が「30分以下」の者よりも得点が高かった ($p < .001$)。さらに, 「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が「30分～1時間」の者よりも得点が高かった ($p < .001$; $p < .01$)。 「積極的対処」では配偶者との会話時間が「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が, 「30分以下」の者よりも得点が高く ($p < .001$; $p < .01$), 「2時間以上」の者の方が「30分～1時間」の者よりも得点が高かった ($p < .001$)。

1日の会話時間 (お休みが合わない日) では夫婦関係満足 ($F(4, 128) = 11.50$, $p < .001$), 「積極的対処」 ($F(4, 128) = 6.24$, $p < .001$) で有意な差がみられた。多重比較の結果, 夫婦関係満足では配偶者との会話時間が「2時間以上」, 「1時間～2時間」, 「30分～1時間」の者の方が, ほとんどない者よりも得点が高かった ($p < .001$; $p < .001$; $p < .05$)。さらに, 「2時間以上」, 「1時間～2時間」, 「30分～1時間」の者の方が, 「30分以下」の者よりも得点が高かった ($p < .001$; $p < .001$; $p < .05$)。 「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が, 「30分～1時間」の者よりも得点が高かった (いずれも $p < .05$)。 「積極的対処」では, 「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が, ほとんどない者よりも得点が高かった (いずれも $p < .01$)。さらに, 「2時間以上」, 「1時間～2時間」の者の方が, 「30分以下」の者よりも得点が高かった ($p < .01$; $p < .05$)。

第4節 相関分析

年齢・末子の年齢・最終学歴・婚姻年数・1日の会話時間 (お休みが合う日)・1日の会話時間 (お休みが合わない日) と各尺度得点の相関係数を算出した (Table 8)。婚姻年数と会話時間はそれぞれ5件法の質問項目で, 数字が大きいほど婚姻年数が長く, 会話時間も長いといった評価になることからみなし順序尺度とした。さらに最終学歴は教育を受けた年数に変換し, 数値が大きいほど教育を受けた年数が長いという評価となる「学歴数値」とした。

Table 8 全体の相関分析 ($n = 133$)

項目	年齢	学歴数値	婚姻年数	会話時間 (お休みが 合う日)	会話時間 (お休みが 合わない)	夫婦関係満足	回避的対処	積極的対処	我慢的対処	解読力	言語的主張	他者への関心	他者受容	非言語的主張	関係調整
年齢	—														
学歴数値	-.126	—													
婚姻年数	.901**	-.167	—												
会話時間 (お休みが合う日)	-.363**	.132	-.397**	—											
会話時間 (お休みが合わない日)	-.426**	.085	-.418**	.567**	—										
夫婦関係満足	-.293**	.193*	-.262**	.573**	.490**	—									
回避的対処	.356**	.055	.331**	-.252**	-.245**	-.335**	—								
積極的対処	-.398**	.237**	-.447**	.452**	.390**	.583**	-.254**	—							
我慢的対処	.188*	.026	.167	-.222**	-.140	-.138	.390**	-.277**	—						
解読力	-.176*	.093	-.162	.006	-.016	.106	-.095	.136	.011	—					
言語的主張	-.154	.116	-.116	-.091	-.007	.033	-.157	.106	-.212*	.205*	—				
他者への関心	-.124	-.092	-.120	-.057	.074	.090	.011	.149	.227**	.424**	.605**	—			
他者受容	-.166	-.021	-.180*	-.070	-.011	.094	.010	.160	.123	.456**	.387**	.225**	—		
非言語的主張	-.244**	-.033	-.188*	.099	-.004	.239**	-.202*	.183	-.063	.310**	.445**	.321*	.504**	—	
関係調整	.056	-.002	.024	-.171*	-.085	.000	.138	.002	.250**	.427**	.475**	.218*	.218*	—	

** $p < .01$, $p < .05$ *

はじめに年齢は、婚姻年数との間に非常に強い正の ($r = .901$, $p < .01$), 会話時間のいずれとも (お休みが合う日・合わない日) の間で中程度の負の相関 ($r = -.363$, $-.426$, いずれも $p < .01$) が示された。また、夫婦関係満足との間に弱い負の相関 ($r = -.293$, $p < .01$) がみられ、関係焦点型コーピングの「回避的対処」との間に中程度の正の ($r = .356$, $p < .01$), 「積極的対処」との間に中程度の負の ($r = -.398$, $p < .01$), 「我慢的対処」との間に弱い正の相関 ($r = .188$, $p < .05$) が確認された。ENDCOREsの「解読力」, 「非言語的主張」との間に弱い負の相関 ($r = -.176$, $p < .05$; $r = -.244$, $p < .01$) がみられた。

学歴数値では、夫婦関係満足との間では弱い正の相関 ($r = .193$, $p < .05$) がみられ、関係焦点型コーピングの「積極的対処」との間に弱い正の相関 ($r = .237$, $p < .01$) が確認された。

婚姻年数では、会話時間のいずれとも (お休みが合う日・合わない日) の間で中程度の負の相関 ($r = -.397$, $-.418$, いずれも $p < .01$) がみられた。夫婦関係満足との間に弱い負の相関 ($r = -.262$, $p < .01$) がみられ、関係焦点型コーピングの「回避的対処」との間に中程度の正の ($r = .331$, $p < .01$), 「積極的対処」との間に中程度の負の ($r = -.447$, $p < .01$) が確認された。ENDCOREsの「他者受容」, 「非言語的主張」との間に弱い負の相関が示された ($r = -.180$, $-.188$, いずれも $p < .05$)。

会話時間 (お休みが合う日) では、会話時間 (お休みが合わない日) との間に強い正の相関 ($r = .567$, $p < .01$) が示された。また、夫婦関係満足との間に強い正の相関 ($r = .573$, $p < .01$) が示され、関係焦点型コーピングの「回避的対処」との間に弱い負の ($r = -.252$, $p < .01$), 「積極的対処」との間に中程度の正の ($r = .452$, $p < .01$), 「我慢的対処」との間に弱い負の相関 ($r = -.227$, $p < .01$) がみられた。ENDCOREsの「関係調整」との間に弱い負の相関 ($r = -.171$, $p < .05$) が示された。

会話時間 (お休みの合わない日) では、夫婦

関係満足との間に中程度の正の相関 ($r = .490$, $p < .01$) がみられ、関係焦点型コーピングの「回避的対処」との間に弱い負の ($r = -.245$, $p < .01$)、**「積極的対処」**との間に弱い正の ($r = .390$, $p < .01$) が示された。

本研究において従属変数として扱う「夫婦関係満足」では、関係焦点型コーピング尺度の「回避的対処」との間に中程度の負の ($r = -.335$, $p < .01$)、**「積極的対処」**との間で強い正の相関 ($r = .583$, $p < .01$) がみられた。ENDCOREsの「非言語的主張」との間に弱い正の ($r = .239$, $p < .01$) 相関が示された。

関係焦点型コーピングの「回避的対処」では、**「積極的対処」**との間に弱い負の ($r = -.254$, $p < .01$)、**「我慢的対処」**との間に中程度の正の相関 ($r = .390$, $p < .01$) がみられた。ENDCOREsの「非言語的主張」との間に弱い負の相関 ($r = -.202$, $p < .05$) が示された。次に**「積極的対処」**では、**「我慢的対処」**との間に弱い負の ($r = -.277$, $p < .01$)、ENDCOREsの「非言語的主張」との間に弱い正の相関 ($r = .183$, $p < .05$) がみられた。最後に**「我慢的対処」**では、ENDCOREsの「言語的主張」との間に弱い負の ($r = -.212$, $p < .05$)、**「他者への関心」**、**「関係調整」**との間に弱い正の相関が示された ($r = .277$, $.250$, いずれも $p < .01$)。

ENDCOREsの「解読力」では、**「言語的主張」**、**「他者への関心」**、**「他者受容」**、**「非言語的主張」**、**「関係調整」**との間に中程度の正の相関 ($r = .369$, $r = .424$, $r = .456$, $r = .310$, $r = .427$, いずれも $p < .01$) が示された。次に**「言語的主張」**では、**「他者への関心」**、**「他者受容」**に弱い正の相関 ($r = .205$, $r = .195$, いずれも $p < .05$) が示され、**「非言語的主張」**、**「関係調整」**との間に中程度の正の相関 ($r = .445$, $r = .321$, いずれも $p < .01$) が示された。さらに**「他者への関心」**では、**「他者受容」**、**「非言語的主張」**、**「関係調整」**との間で中程度～強い正の相関 ($r = .605$, $r = .387$, $r = .475$, いずれも $p < .01$) がみられた。**「他者受容」**では、**「非言語的主張」**、**「関係調整」**との間で弱い～強い正

の相関 ($r = .225$, $r = .504$, いずれも $p < .01$) がみられた。最後に**「非言語的主張」**では、**「関係調整」**との間に弱い正の相関がみられた ($r = .218$, $p < .05$)。

第5節 階層的重回帰分析

夫婦関係満足を従属変数、四分位で分けた年齢、婚姻年数、1日の会話時間（お休みが合う日・合わない日）と、関係焦点型コーピング、ENDCOREsの各因子を独立変数として階層的重回帰分析を行った（Step1, Step2）。四分位で分けた年齢、婚姻年数、1日の会話時間（お休みが合う日・合わない日）は、分散分析を行った結果夫婦関係満足の得点に有意差があったことから、これらは統制変数として投入した（ステップワイズ法）。その際に、関係焦点型コーピングの各因子の得点とENDCOREsの各因子の得点の組み合わせによる夫婦関係満足の影響をみるために、関係焦点型コーピングの各因子×ENDCOREsの交互作用項も変数として含め、3回に分けて分析を行った（Step3, いずれも強制投入法）。結果はTable 9にて示した。

はじめに、回避的対処とENDCOREsの各因子を独立変数とした分析の結果（Figure 2）、1日の会話時間（お休みが合う日・合わない日）が夫婦関係満足に正の影響を示していた ($\beta = .385$, $p < .001$; $\beta = .243$, $p < .01$)。さらに、回避的対処 ($\beta = -.161$, $p < .05$)、非言語的主張 ($\beta = .181$, $p < .05$) が夫婦関係満足に負の影響を示した。回避的対処×ENDCOREsの各因子の交互作用項については有意な影響が認められなかった。

次に、積極的対処とENDCOREsの各因子を独立変数とした分析の結果（Figure 3）、1日の会話時間（お休みが合う日・合わない日） ($\beta = .280$, $p < .001$; $\beta = .205$, $p < .05$)、積極的対処 ($\beta = .353$, $p < .001$)、非言語的主張 ($\beta = .183$, $p < .05$) が夫婦関係満足に正の影響を示した。積極的対処×ENDCOREsの各因子の交互作用項については有意な影響が認められなかった。

Table 9 夫婦関係満足に影響を与える関係焦点型コーピングとENDCOREsの要因

項目	関係焦点型コーピング尺度の各因子											
	回避的対処				積極的対処				我慢的対処			
	Step 1 β	Step 1 p	Step 2 β	Step 2 p	Step 3 β	Step 3 p	Step 1 β	Step 1 p	Step 2 β	Step 2 p	Step 3 β	Step 3 p
1日の会話時間 (お休みが合う日)	.435	.000	.385	.000	.376	.000	.435	.000	.400	.000	.365	.000
1日の会話時間 (お休みが合わない日)	.243	.005	.243	.005	.240	.008	.243	.005	.270	.002	.297	.001
関係焦点型コーピング尺度因子			-.161	.031	-.133	.803			-.014	.860	-.967	.335
解決力			.015	.856	.013	.883			.358	.721	-.755	.452
言語的主張			-.069	.399	-.067	.437			-.606	.546	-.777	.439
他者への関心			-.050	.597	-.048	.628			-.608	.544	.151	.880
他者受容			.089	.330	.090	.346			1.023	.308	1.140	.257
非言語的主張			.181	.033	.183	.040			2.459	.015	2.475	.015
関係調整			.063	.467	.075	.426			.370	.712	.376	.708
[関係焦点型コーピング尺度各因子×解決力]			.007	.942	.007	.942					-.471	.638
[関係焦点型コーピング尺度各因子×言語的主張]			-.232	.432	-.232	.432			-.776	.439		
[関係焦点型コーピング尺度各因子×他者への関心]			.314	.585	.314	.585					2.349	.020
[関係焦点型コーピング尺度各因子×他者受容]			-.152	.778	-.152	.778			.066	.486	-.224	.823
[関係焦点型コーピング尺度各因子×非言語的主張]			.154	.603	.154	.603			-.269	.003	1.129	.261
[関係焦点型コーピング尺度各因子×関係調整]			-.125	.715	-.125	.715			-.133	.137	-1.732	.086
R^2	.369		.440		.448		.369		.507		.418	
ΔR^2	.359**		.399*		.377		.359**		.471***		.376	

注. 階層的重帰帰分析. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
注. 年齢四分位と婚姻年数はステッブワイズ法で除外されたことにより記載なし.

Figure 2 夫婦関係満足に影響を与える要因（回避的対処とENDCOREs）

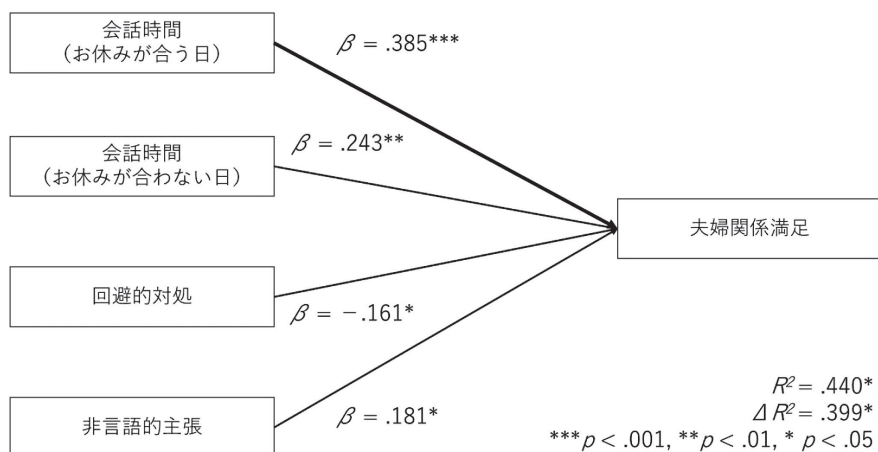


Figure 3 夫婦関係満足に影響を与える要因（積極的対処とENDCOREs）

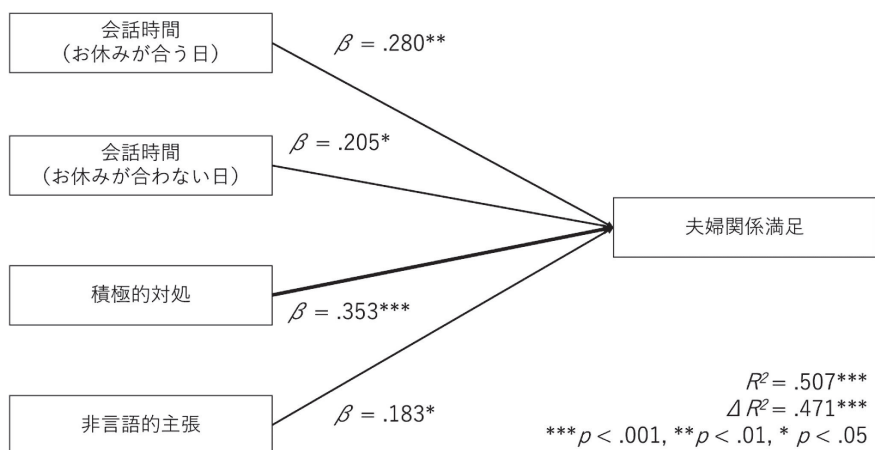
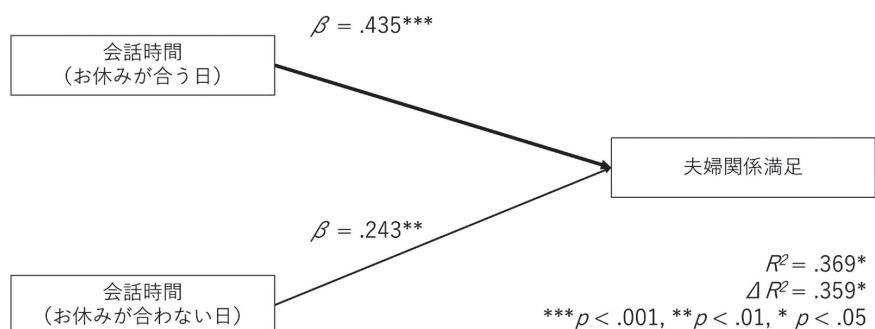


Figure 4 夫婦関係満足に影響を与える要因（我慢的対処とENDCOREs）



最後に、我慢的対処とENDCOREsの各因子を独立変数とした分析の結果 (Figure 4), 1日の会話時間 (お休みが合う日・合わない日) が夫婦関係満足に正の影響を示していた ($\beta = .435, p < .001; \beta = .243, p < .01$)。我慢的対処 $\times$ ENDCOREsの各因子の交互作用項については有意な影響が認められなかった。

第V章 考察

第1節 調査協力者の特徴

本研究における調査協力者の特徴として、全体のうち65%が女性、35%が男性であることから女性の割合が多く、子どもがいる既婚者が全体のうちの91%を占めている。年齢では、日本の総人口において50～54歳の人口が男女ともに最も多く (総務省, 2023), 本研究でも50代の割合が高いことは日本全体と同様の傾向を示す。他方で、25～39歳の人口に大きな差がみられないにも関わらず (総務省, 2023), 本研究では30代のデータが最も少ない為、30代による回答が結果に反映されにくかったことが示唆される。これに関連して、男性において婚姻年数が20年以上である既婚者が多く、女性においても5年未満と20年以上である既婚者が多いことから、その間にある婚姻年数が5～15年である既婚者による回答も、結果に反映されていない可能性が考えられる。

また、その他の調査対象者の属性において、離婚歴は133名中12名がありと回答しており、本研究における再婚者の割合は10%程度であることが窺われる。内閣府男女共同参画局 (2022) によれば、再婚件数の割合は2005年以降において約25%前後とされていることから、本研究の調査対象者は現在継続している婚姻関係が初婚である既婚者が多いことが示唆される。

さらに、男性のうち83%が正社員として就業しており、女性は49%が正社員、次に多い就業形態は35%でパート・アルバイトであった。日本全体の就業形態の傾向として、男性は日本全体と同様の傾向を示すが、女性は日本全

体で非正規雇用の割合の方が高いことが示されていることから (総務省, 2020), 本研究においては正規雇用の女性が多い傾向であることも特徴として挙げられる。最終学歴では、日本全体の傾向として高校卒が最も多い一方で (総務省, 2023), 本研究では男女ともに大学卒の既婚者が最も多いことから、調査協力者の特徴として挙げられる。

1日の会話時間は、男女ともにお休みが合う日は2時間以上、お休みが合わない日は30分以上会話している既婚者が約7割を占めていた。江崎グリコ株式会社 (2019) が行ったインターネット調査では、夫婦の1日の会話量の平均が62.7分であると報告されている。それに対し、本研究では夫婦でお休みが合わない日でも、30分以上～1時間、1時間～2時間、2時間以上が約7割を占める中で、2時間以上会話するという既婚者の割合が男女ともに最も多かった。本研究の調査対象者は概ね平均程度～平均以上の時間で、配偶者と会話していると考えられる。

これらのことから、本研究の調査協力者は、大学卒で正社員あるいはパート・アルバイトで就業している子どもを持つ女性の割合が多いことが示唆される。そして、男女ともに休みが合わない日でも平均程度からそれ以上の会話量である既婚者が約7割を占めており、配偶者との会話時間が比較的確保されている既婚者が調査対象となっていることが推察される。

第2節 デモグラフィックデータと各尺度 (夫婦関係満足・関係焦点型コーピング・コミュニケーションスキル)

はじめに、男性の方が女性よりも関係焦点型コーピングにおいて「我慢的対処」をとることが多いという t 検定の結果は、小野寺 (2005) の先行研究の結果と一致している。小野寺 (2005) は「親になる前」及び、「親になって2年後」、「親になって3年後」といった3つの時期全てにおいて、男性の方が「我慢」得点が高いことを報告している。本研究では、年齢を四分位で分けたものを独立変数、「我慢的対処」

を従属変数に設定した1要因分散分析では差がみられていないことから、年齢に関係なく、既婚者の男性は女性と比較して配偶者との間におけるストレス場面で我慢的な対処を行う傾向があることが考えられる。

先行研究では、夫側の方が妻側よりも夫婦関係満足度が高い傾向が多く指摘されてきたが(e.g. 伊藤, 2015; 伊藤・相良, 2012; 伊藤・相良・池田, 2007), 本研究では性別による「夫婦関係満足」の得点の差はみられなかった。本研究において、前節で述べた通り、婚姻年数が「5年未満」と「20年以上」の既婚者が多いという対象者の偏りが確認されている。結婚当初は男女ともに夫婦の関係満足が最も高く評価されやすく(伊藤, 2015), 本研究の分散分析においても婚姻年数が「5年未満」である者の「夫婦関係満足」が最も高いという結果が認められている。そのため、「夫婦関係満足」の得点に性別による差がみられなかったことは、婚姻年数「5年未満」の結婚初期の既婚者が多いという対象者の偏りによる影響が考えられる。

一方で、婚姻年数「20年以上」の既婚者も多かったにも関わらず、「夫婦関係満足」に性差がみられなかったことは「1日の会話時間」が関係していると考えられる。会話時間が与える夫婦関係満足度の影響力は妻側に特に大きいことが明らかになっている(伊藤, 2015; 伊藤・相良, 2012; 伊藤・相良・池田, 2007)。本研究の分散分析結果においても、2時間以上の会話をしている既婚者の「夫婦関係満足」の得点が最も高いことや、会話時間と「夫婦関係満足」との相関関係がどの変数よりも強く、実際に「夫婦関係満足」へ影響を及ぼしていることが階層的重回帰分析で明らかになっている。本研究の調査対象者は全国の平均に対し、男女ともに比較的会話時間が確保されている既婚者が多かった。特に妻側において会話時間と夫婦関係満足度の間に関連性がある中で、全国の平均以上に会話をしているという本研究の調査対象者の特徴は、「夫婦関係満足」の得点で男女差がみられなかった背景の1つとして考えられる。

次に、子どもの有無による t 検定の結果、子どもがいない既婚者の方が、子どものいる既婚者よりも「夫婦関係満足」と「積極的対処」の得点が高いことが明らかになっている。子どものいる既婚者の方が「夫婦関係満足」が低いという結果の背景には、梅田・島谷・長沼(2016)の先行研究が報告している通り、妻側において「家事や育児などに対する配偶者の協力」などの重要度が高いと意識していながらも充足度が低いと認識している傾向があることや、子どもをもつことで妻が夫にもっと家庭に関与してほしいという要望が強くなること(伊藤, 2015)などが関係していると考えられる。これらのようにして、妻側において夫婦関係に不満を抱えやすく、夫側と比較して「夫婦関係満足」が低かったと考えられる。

さらに、子どもがいない既婚者の方が「積極的対処」を行っている傾向が示されている。このことには、積極的に話し合って葛藤や問題を解決していくことを困難にさせる要因である、時間的制限の中での難しさ(東海林, 2006)が関係していると考えられる。協調的な対処によって夫婦双方が納得できる答えを見出すことは時間がかかることであり、特に共働きである場合は仕事と家事とで忙しい毎日を送っているため、自分の意見を主張することで寝る時間が遅くなってしまったり、明日の仕事に差し支えてしまったりと、互いの生活を崩してしまう可能性がある(東海林, 2006)。それに加え、子どもがいれば、仕事と家事のみならず子どもの対応として育児が加わってくる。物理的な時間の確保もより困難となり、夫婦二人で生活している以上に、常に問題について積極的に話し合って解決していくことは難しくなる可能性が考えられる。

また、最終学歴の専門学校と短期大学の間でみられたENDCOREsの「関係調整」の得点の有意差については、先行研究の中で確認されたことのない結果であった。「関係調整」の度数分布から詳細を確認したところ、専門学校卒の中での「関係調整」得点の最小値9, 最大値

21, 中央値が14であるのに対し, 短期大学卒の中での最小値4, 最大値18, 中央値が11であり, 短期大学卒において全体的に低い得点に分布していた。柏木・平山(2003)で, 学歴と夫婦関係の認識について関連性が見出されているが, 短期大学と専門学校に関する結果は報告されていない。また, 「短大・専門卒」といった形で同じカテゴリーとして扱っている先行研究があることから(平山・柏木, 2001; 柏木・平山, 2003; 伊藤・相良, 2010), 基本属性の分類設定が適切でなかったことから生じた結果であると考えられる。

婚姻年数別において「夫婦関係満足」と「積極的対処」の得点は5年未満の既婚者が最も高く, 15年未満と比較して15年以上の既婚者の方が「回避的対処」の得点が高かった。本研究における「積極的対処」は積極的に配偶者と関わりあって問題に対処すること, 「回避的対処」は問題が生じても配偶者との関わりを避けて問題に対処することを指すといったように, 配偶者に対するコミュニケーション態度が背景にある尺度因子である。これらから, 柏井(2014)の先行研究による, 夫婦関係初期群におけるコミュニケーション態度が最も共感・接近的なポジティブ傾向であり, 結婚年数が15～29年にある夫婦は威圧や無視といったネガティブ傾向が高いといった結果と同様の傾向を示していると考えられる。

第3節 関係焦点型コーピングとENDCOREs

ENDCOREsの「非言語的主張」と関係焦点型コーピングの「積極的対処」の間では弱い正の相関($r = -.202, p < .05$), 「回避的対処」の間では弱い負の相関($r = -.202, p < .05$)がみられた。自分の気持ちを表情やしぐさで表現することや自分の心理状態を正しく察してもらうことを得意に感じていればいほど, 「積極的対処」を行い, 「回避的対処」は行われていない可能性が示唆される。

関係焦点型コーピングの「我慢的対処」では, ENDCOREsの「言語的主張」との間で弱い負

の相関($r = -.212, p < .05$), 「他者への関心」, 「関係調整」との間で弱い正の相関($r = .277, .250$, いずれも $p < .01$)という結果がみられた。この結果からは, 人間関係の良好さを第一に考えることが得意で, 自分の意見など自己主張することを苦手に感じ, 相手と対立した場合には適切に自分の気持ちを調整できると感じている人ほど, 「我慢的対処」を行っている可能性が示唆される。

他方で, 「我慢的対処」において正の相関がみられた「関係調整」と「他者への関心」は, 双方ともに「他者受容」との相関が最も強いが($r = .504, r = .605$, いずれも $p < .01$), 「我慢的対処」と「他者受容」の間では相関はみられていない。すなわち, 「我慢的対処」をとりやすい人は相手のことを受け入れたり, 共感したりすることがどのぐらい得意と認識しているかは関係なく, 人間関係を良好に維持することを第一に考え, 感情や意見が対立した際の不和や自分の気持ちをうまくコントロールして対処することができると感じている人であることが考えられる。東海林(2006)は譲歩的な対処の機能の1つに「その場の情緒状態が陰悪になるのを避ける」という機能があることを示しており, 本研究における「我慢的対処」は, 何でも相手を受け入れて自分の気持ちを抑えるようなネガティブな対処というより, 相手との関係やその場の状況を配慮するようなポジティブな対処である可能性が示唆される。

第4節 夫婦関係満足に影響を及ぼす要因

「夫婦関係満足」を従属変数, 関係焦点型コーピングの各因子とENDCOREsの各因子で組んだ交互作用項を独立変数とした階層的重回帰分析の結果(Step3), コーピングが夫婦関係満足度に与える影響を, コミュニケーションスキルが調整する効果はみられず, 本研究の仮説は支持されなかった。仮説が支持されなかった理由について, 本研究でコミュニケーションスキルを測定するために用いた尺度の限界点が挙げられる。ENDCOREsは自己記入式の尺度であり,

各項目に対して自分自身がどの程度得意あるいは苦手と認識しているかを回答するため、反映される結果は回答者の認識に限られる。夫婦関係とはお互いに影響し合う相互的な関係であることから (e.g. 粕井, 2014; 平山・柏木, 2001; 伊藤・相良・池田, 2007), 両者がお互いのことをどのように認識しあっているかがより重要になる。本研究の相関分析の結果からも, ENDCOREsの各因子よりも「1日の会話時間 (お休みが合う日・合わない日)」の方が, 関係焦点型コーピング, 「夫婦関係満足」との間の相関が強いことが示されていた。すなわち, 相互作用の中で変化していくという特徴をもつ夫婦関係と, 個人の持つコミュニケーションスキルの認識とでは関連性が小さく, 影響がみられなかったと考えられる。むしろ, 相関分析の結果からコーピングが「夫婦関係満足」に与える影響を調整する要因は配偶者との会話時間である可能性が考察される。夫婦が積極的に話し合うことの難しさの1つに時間的制約が挙げられることから (東海林, 2006), 夫婦間でストレスが生じた際にはコミュニケーションがうまくできるかよりも, 話し合う時間が確保できるかの状況把握が優先されていると考えられる。

仮説は支持されなかった他方で, 直接効果として「夫婦関係満足」に影響を与えていた要因が確認されている。その要因は「1日の会話時間 (お休みが合う日・会わない日)」, 関係焦点型コーピングの「回避的対処」と「積極的対処」, コミュニケーションスキルのENDCOREsの「非言語的主張」の4つであった。

まず, 「夫婦関係満足」と関係焦点型コーピングの関係性について, 「回避的対処」との間には負の相関, 「積極的対処」との間には正の相関, 「我慢的対処」との間には相関がみられなかった。ここまでは黒澤・加藤 (2013) が報告している結果と一致する結果である。さらに, その因果関係として本研究では「夫婦関係満足」に対し「回避的対処」が負の影響, 「積極的対処」が正の影響を及ぼすが, 「我慢的対処」が「夫婦関係満足」に影響を及ぼすという

結果は確認されなかった。「夫婦関係満足」と「回避的対処」, 「積極的対処」との間の因果関係については, 加藤 (2001) による大学生を対象とした先行研究と同様の傾向が示された。「回避的対処」は「夫婦関係満足」を低下させ, 「積極的対処」は「夫婦関係満足」を上げるという結果は, 良好な夫婦関係を維持するにおいてコミュニケーションの重要性を再確認できた結果といえる。

次に, 「我慢的対処」が「夫婦関係満足」に影響を与えなかった結果については, 以下の先行研究からその背景が考えられる。解決先送りコーピングと呼ばれる「気にしないようにした」などの, 本研究における「我慢的対処」と類似した項目から成る因子について, 加藤 (2000) は「ストレスフルな対人関係に対して, 何もしないというコーピングであるために, 相互にかかわり合うことも, 傷付け合うこともない」と説明している。また, 生じた問題や葛藤に対して長期的に解決していけたら良いと考えるように, 夫婦間の葛藤を長期的に抱えていくものとして捉えている場合がある (東海林, 2006)。東海林 (2006) はこのような対処が関係やコミュニケーションのあり方を安定させ, 今この関係を後に繋げる契機となると示している。本研究における「我慢的対処」も, 夫婦関係を継続していくためにあえて明るく振る舞ったり, 不満に感じていることを見せないようにと, 互いに傷付け合わないようなコーピングであり, このようなコーピングは夫婦の関係が満足かどうかの認識には統計的に影響を与えないことが考えられる。

コミュニケーションスキルのENDCOREsの中で唯一「夫婦関係満足」に影響まで与えていた「非言語的主張」のスキルについては, 表情やしぐさで自分の気持ちを伝え, 相手に自分の気持ちを正しく接してもらうというスキルである。うまくいっていない夫婦において, Argyle & Henderson (1985 森永訳 1992) は, 夫側の非言語的コミュニケーションが足りていないこと, 妻の感情を正しく理解していない場合が多

いことについて述べている。相手の心理状態を推測するにおいて、表情やしぐさなどの非言語的なものは重要な情報である（湯浅・安村・新田, 2001；高木, 2005）。先行研究では夫側の非言語コミュニケーションの問題について述べられていた一方で、本研究の結果では非言語主張のスキルについては男女ともに夫婦関係を良好と感じられるために必要なスキルであることが考えられる。

さらに、「夫婦関係満足」に最も影響を及ぼしていた要因は「1日の会話時間（お休みの合う日・合わない日）」であった。本研究の調査対象者は夫婦でお休みが会う日において「2時間以上」の既婚者が多く、休日は買い物や外食など夫婦や家族で共に出掛けていることが推察される。特に妻において、会話時間の多さと夫との共同活動の頻度が高いことは夫婦関係満足度を高める傾向にあり（伊藤・相良, 2012）、本研究でも同様の傾向が認められた。

第Ⅵ章 本研究のまとめ

本研究ではコーピングが夫婦関係満足度に与える影響を、コミュニケーションスキルが調整するかどうかを検討することを目的としたが、コミュニケーションスキルが調整効果として働くという本研究の仮説は支持されなかった。仮説が支持されなかった背景として、本研究でコミュニケーションスキルを測定するために用いた尺度の限界点が関係していると考えられる。相関分析の結果から、コーピングが「夫婦関係満足」に与える影響を調整する要因は個人の持つコミュニケーションスキルの認識ではなく、配偶者との会話時間である可能性が示されている。

今回の結果から、夫婦関係の満足度を高めるためには、積極的に配偶者と関わり合って問題に向き合うこと、表情やしぐさなどの非言語の主張スキルを持つこと、配偶者との物理的な会話時間が必要であることが明らかとなった。夫婦間でストレスが生じた際には、率直にそのことについて話し合ってみることも、配偶者をもっと

理解しようと積極的に行動するコーピングが、満足度を高めるのに非常に有効な手段であることが示唆される。コミュニケーションスキルにおいては、「夫婦関係満足」に弱いながらも直接影響を与えていたという点で、特に非言語の主張スキルを持つことが重要であると考えられる。

コミュニケーションスキルが調整効果として働かないという結果であった他方で、関係焦点型コーピングの各因子とENDCOREsの各因子の間で相関がみられたところがあり、その関係性から示唆される基礎的な知見がある。たとえば前節で、自分の気持ちを表情やしぐさでうまく表現することや、自分の感情や心理状態を正しく察してもらう「非言語的主張」を得意に感じていればいるほど「積極的対処」を行い、「回避的対処」を行わないという関係性について述べた。すなわち、表情やしぐさなどの非言語的主張のスキルは高ければ高いほど、「夫婦関係満足」を低下させる「回避的対処」ではなく、「夫婦関係満足」を高める「積極的対処」をとられやすく、結果として夫婦関係の満足に繋がる可能性があると考えられる。Argyle & Henderson (1985 森永訳 1992) は、葛藤状態にある夫婦の特徴的なコミュニケーションとして、特に非言語的なものでネガティブなコミュニケーションが多く、片方が始めることで、もう片方もネガティブになることでそういったコミュニケーションが生じていることを指摘している。夫婦間の悪循環から抜け、関係改善の手段として、表情やしぐさなどの非言語コミュニケーションの必要性が示唆されており、本研究の結果からも同様のことが推察される結果であったと考えられる。

「我慢的対処」に関しては、ENDCOREsの「関係調整」と「他者への関心」との間に正の相関がみられたことで、東海林（2006）の先行研究と同様に「我慢的対処」が「その場の情緒状態が険悪になるのを避ける」、「関係やコミュニケーションのあり方を安定させ、今ここの関係を後に繋げる」という機能として働いている可能性が推測される。「我慢的対処」は夫婦関係

が満足かどうかの認識に統計的に影響を与えないが、夫婦関係を継続させていくためには必要な機能を持つコーピングであると示唆される結果が得られた。

以上のことから、本研究の仮説は検証されなかったものの、コミュニケーションスキルにおいて特に非言語の主張スキルの必要性和、夫婦の関係性における関係焦点型コーピングの各対処の機能が明らかとなり、僅かながら夫婦関係の改善のための基礎的な知見が得られたと考えられる。

第Ⅶ章 本研究の限界点と今後の展望

本研究の問題としては、まず調査対象者の偏りがあったことが挙げられる。年齢において20代と50代が極端に多く、30代～40代のデータが少なかった。それに伴い婚姻年数も、男性において20年以上である既婚者が多く、女性においては5年未満と20年以上である既婚者が多かったことから、その間にある婚姻年数が5～15年である既婚者による回答が結果に反映されていない可能性が考えられる。

これまでの数多くの先行研究で、夫婦関係とは夫と妻のコミュニケーション態度に相違があり、またお互いの行動が相手の要因に影響を与え、それによって夫婦の関係性の認識も変わるといった相互的な関係であることが明らかになっている (e.g. 粕井, 2014; 平山・柏木, 2001; 伊藤・相良・池田, 2007)。関係焦点型コーピング尺度が用いられた先行研究においても、夫と妻のそれぞれが行うコーピングの組み合わせで、結婚満足度の得点に有意な差があると報告されている (黒澤・加藤, 2011)。本研究では個人の持つコミュニケーションスキルが調整効果として作用するかをみるために、夫婦単位でのペアデータではなく、既婚者という個人単位で調査を行った。そのため、今回の研究結果を考察していくにあたり、相互関係にある夫婦としての実態ではなく、既婚者という属性を持つ個人の傾向に留まってしまう限界点があ

った。また、この限界点は仮説の支持に至らなかった大きな要因でもあったと考えられる。

本研究では、唯一コミュニケーションスキルの「非言語的主張」が「夫婦関係満足」に弱い正の影響を与えるという直接効果がみられている。このことから、「非言語的主張」スキルが夫婦の会話を促進させる、あるいは確保できる会話時間が少なくても夫婦双方が満足できるコミュニケーションをとることができる実際的な効果を持つ可能性が示唆される。一方で、主に自閉スペクトラム障害など社会的相互反応を示したり応じたりすることに困難さがある特性を持つ者に関しては今回の結果にあてはまらない可能性があり、本研究における限界点の1つである。

今後の展望としては、以下のようにまとめる。本研究では配偶者との会話時間の重要性が示唆される結果となった。江崎グリコ株式会社 (2019) の調査では、夫婦の会話に必要だと思う時間が平均80.6分とされる一方で、婚姻年数が5年以上の夫婦の実際の会話時間は54.5分、子どもがいる夫婦の実際の会話時間は48.5分であり、関係が長くなり、子どものいる夫婦ほど理想とされる会話時間よりも会話時間が足りていない状況であることが示唆されている。婚姻年数が長くなると回避的なコミュニケーションがみられることから会話するきっかけ自体がなくなってしまう、あるいは共働き世帯が増えたことによって (厚生労働省, 2013)、夫婦間の会話時間を確保すること自体に限界があるなど、さまざまな要因が考えられる。これらのことから、無理のない会話時間の確保や補完のための方法について検討をしていく必要がある。

さらに、1日の会話時間と「積極的対処」、「回避的対処」にそれぞれ正と負の相関がみられたが、会話時間が確保できる (確保できない) ことで積極的 (回避的) な対処が行われているのか、積極的 (回避的) な対処を行っているために会話時間が増えて (減って) いるのか、これらの両者間の因果関係は不明である。以上の

ことを踏まえ、今回は夫婦関係満足尺度を従属変数として仮説・分析を行ったが、1日の会話時間を従属変数とした場合、コミュニケーション

ンスキルが持つ新たな効果がみられる可能性があると考ええる。

引用文献

- 相川 充 (2009). 社会的スキルという考え方 安藤清志・松井 豊 (編) 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学, サイエンス社, pp. 1-12.
- 相川 充 (2009). 社会的スキルの不足がもたらすもの 安藤清志・松井 豊 (編) 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学, サイエンス社, pp. 201-220.
- 後山尚久 (2002). 成長した子供と母親との関係が女性の心身に与える影響——空の巣症候群—— 日本女性心身医学会雑誌, 7 (2), 192-197.
- 大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説：適応的な対人関係の構築 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- 江崎グリコ株式会社 (2019). 夫婦の会話、理想と現実を明らかに！夫婦間に温度差あり!? https://kyodonewsprwire.jp/prwfile/release/M101037/201911183599/_prw_PR1fl_1XgXP522.pdf (2023年12月18日取得)
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15 (3), 347-361.
- 藤本 学 (2013). コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討 パーソナリティ研究, 22 (2), 156-167.
- 橋本 剛 (1995). スレッサーとしての対人葛藤——ストレス低減方略への展望—— 実験社会心理学研究, 35 (2), 185-193.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13 (1), 64-75.
- 平山順子・柏木恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究, 12 (3), 216-227.
- 平山順子・柏木恵子 (2004). 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15 (1), 89-100.
- 伊藤裕子 (2015). 夫婦関係における親密性の様相 発達心理学研究, 26 (4), 279-287.
- 伊藤裕子・相良順子 (2012). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——中年期夫婦を対象に—— 心理学研究, 83 (3), 211-216.
- 伊藤裕子・相良順子 (2010). 中年期から高齢期における夫婦の役割意識——個別化の視点から—— 文京学院大学人間学部研究紀要, 12, 162-176.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響——自己開示を中心に—— 文京学院大学人間学部研究紀要, 9 (1), 1-15.
- 岩尾侑充子・斎藤ひさ子 (2012). 妊娠期の夫婦関係に関連する要因 日本助産学会誌, 26 (1), 40-48.
- 片山美由紀 (2001). 夫婦関係満足尺度 堀 洋道 (監修) 吉田富二雄 (編) 心理測定尺度集Ⅱ——人間と社会のつながりをとらえる＜対人関係・価値観＞——, サイエンス社, pp. 149-152.
- 柏木恵子 (2003). 3章 結婚生活と夫婦関係 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点—— pp. 149-150.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性——妻はなぜ不満か—— 心理学研究, 74 (2), 122-130.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49 (3), 295-304.
- 加藤 司 (2002). 共感的コーピング尺度の作成と精神的健康との関連性について 社会心理学研究, 17 (2), 73-82.
- 黒澤 泰・加藤道代 (2013). 夫婦間ストレス場面における関係焦点型コーピング尺度作成の試み 発達心理学研究, 24 (1), 66-76.
- 粕井みづほ (2014). 夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い 日本家政学会誌, 65 (2), 50-56.
- 厚生労働省 (1997). 第1編 第1部「健康」と「生活」の質を目指して 第3章 現代社会と「心の健康」 https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1997/dl/05.pdf (2024年6月10日取得)

- 厚生労働省 (2013). 第2節 結婚に関する意識
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf> (2023年10月16日取得)
- 厚生労働省 (2021). 令和3年度「出生に関する統計」の概況, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo07/dl/gaikyou.pdf> (2023年10月16日取得)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2020). 全国家庭動向調査 結果の概要 https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Mhoukoku/kateidoukou6_kekka_20230630.pdf (2023年11月23日取得)
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R. S. & フォークマン, S. 木明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究—— 実務教育出版, pp. 119-172.)
- 増田秋紀・山中隆夫・武井美智子・平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭 忠和 (2004). 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について 日本心身医学会, 44 (12), 903-909.
- 益子洋人 (2013). 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連——過剰適応を「関係維持・対立回避的行動」と「本来感」から捉えて—— 教育心理学研究, 61 (2), 133-145.
- 町田佳世子 (2009). コミュニケーション能力, ストレス対処, 意欲の関連 札幌市立大学研究論文集, 3 (1), 35-44.
- 内閣府男女共同参画局 (2022). 結婚と家族をめぐる基礎データ <https://www.gender.go.jp/kaigi/kento/Marriage-Family/8th/pdf/1.pdf> (2023年11月23日取得)
- 内閣府男女共同参画局 (2022). 令和4年版 男女共同参画白書 [https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_gian.nsf/html/gian/gian_hokoku/20220614danjogaiyo.pdf/\\$File/20220614danjogaiyo.pdf](https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_gian.nsf/html/gian/gian_hokoku/20220614danjogaiyo.pdf/$File/20220614danjogaiyo.pdf) (2023年10月15日取得)
- 中島久美子・常盤洋子 (2008). 妊娠期の妻への夫の関わりと夫婦関係に関する研究の現状と課題, 群馬保健学紀要, 29, 111-119.
- 永田忠夫 (1999). 良好な夫婦システムに影響を及ぼすコミュニケーション行動 愛知淑徳短期大学研究紀要, 38, 1-21.
- 長津美代子 (1996). 家族の多様化と個別化 日本家政学会誌 47 (8), 769-775.
- 野口康彦 (2013). 親の離婚を経験した子どもの心の発達——思春期時代を中心に 法と心理, 13 (1), 8-13.
- 岡堂哲雄 (1999). 家族のライフ・コースと発達段階 家族心理学入門. 培風館.
- 岡堂哲雄 (2006). 8 離婚カウンセリング 家族というストレス. 新曜社, pp. 95-108.
- 小野寺敦子 (2005). 親になることにともなう夫婦関係の変化 発達心理学研究, 16 (1), 15-25.
- 落合恵美子 (2004). 家族の戦後体制 21世紀家族へ. 有斐閣, pp. 98. Michael Argyle & Monika Henderson (1985). *The Anatomy of Relationships*. Penguin books. (M・アーガイル & M・ハンダーソン 吉森 護 (編訳) 吉森 護・深田博巳・廣兼孝信・越 良子・森永康子・大坪靖直・坪田雄二・植田 智 (訳) (1992). 人間関係のルールとスキル 北大路書房, pp. 121-154)
- 諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における平衡性の知覚 家族心理学研究, 10 (1), 15-30.
- 東海林麗香 (2006). 夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能: 新婚女性によって語られた意味づけ過程に焦点を当てて 発達心理学研究, 17 (1), 1-13.
- 白井利明 (1997). 青年心理学の観点から見た「第二反抗期」心理科学, 19 (1), 9-24.
- 菅原ますみ・八木下暁子・訖摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連——家族機能及び両親の養育態度を媒介として—— 教育心理学研究, 50, 129-140.
- 棚瀬一代 (2004). 離婚の子どもに与える影響: 事例分析を通して 現代社会研究, 6, 19-37.
- 高木幸子 (2005). コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割 早稲田大学大学院文学研究科紀要第1分冊, 51, pp. 25-36.
- 梅田弘子・島谷智彦・長沼貴美 (2016). 乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴——夫婦それぞれの評価に着目して—— 広島国際大学看護学ジャーナル, 14 (1), 57-67.
- 山田昌弘 (2004). 家族の個人化 社会学評論, 54 (4), 341-354.
- 山本倫子・伊藤裕子 (2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連 家族心理学研究, 26 (1), 83-94.
- 湯浅将英・安村禎明・新田克己 (2001). 交渉における擬人化エージェントの表情戦略 社団法人電子情報通信学会, 100 (542), 15-21.

直原康光・安藤智子（2020）．別居・離婚後の父母
葛藤・父母協力と子どもの心理的苦痛，適応
等との関連：児童期から思春期に親の別居・

離婚を経験した者を対象とした回顧研究 発
達心理学研究, 31（1），12-25.

付 録

1. 本研究参加際の手順書

＜本研究の参加方法と手順＞

この度は、研究にご協力いただきありがとうございます。下記に参加方法をお示しますので、ご参照の程お願い申し上げます。

本調査の参加方法は、本質問用紙の郵送もしくは添付の QR コードから Google フォームにて回答いただく方法があります。研究の参加に同意がいただける方は、回答しやすい方法にて調査にご参加ください。

郵送で本用紙に回答の方 ⇒ 回答後は下記の＜郵送の手順＞の通りに郵送をお願いいたします。回答はアンケート用紙の 2 ページからの質問にお答えください。

Google フォームで回答の方 ⇒ 下記の＜Google フォームの手順＞にある QR コード読み取りの上、質問にお答えください。

＜郵送の手順＞

アンケートの趣旨をご理解いただき、アンケートへの回答に同意された方は、アンケート用紙にご記入をお願い申し上げます。アンケート用紙の回収方法は、添付の返信用封筒を使用して投函してください。なお、返信用封筒には住所等の必要事項が記入してありますので、何も記入せずにそのまま投函してください。調査用紙を無記名で回収するため調査用紙投函後、研究参加の撤回はできません。

＜Google フォームの手順＞

アンケートの趣旨をご理解いただき、アンケートへの回答に同意された方は、下記の QR コードの読み取りをお願い申し上げます。全ての質問に回答が終わりましたら、回答送信のボタンをクリックしてください。なお、無記名での回答をお願いしているため、フォームの送信終了後に研究参加の撤回はできません。



← こちらの QR コードを読み取りください。

URL: <https://forms.gle/SQvaiJg5EDyXAsBF7>

ご協力よろしくお願い申し上げます。

よろしくお願いします



2. フェイスシート（Google フォームでの回答の場合も同様の内容）

はじめに、以下の質問にお答えください。

1	年 齢	()		才)
2	性 別	☐ 男 性	☐ 女 性	
3	離 婚 歴	☐ あ り	☐ な し	
4	子どもの有無	☐ あ り	☐ な し	
5	※「4.子どもの有無」で「あり」と答えた方			
	末子の年齢	()		才)
6	就業形態	☐ 正社員・常勤	☐ パート・ アルバイト	
		☐ 自営業	☐ その他	
7	最終学歴	☐ 中学校	☐ 高等学校	☐ 専門学校
		☐ 短期大学	☐ 大学	☐ 大学院
8	婚姻年数（以上～未満）	☐ 5年未満	☐ 5～10年	
		☐ 10～15年	☐ 15年～20年	
		☐ 20年以上		
9	1日の会話時間			
	夫婦でお休みが合う日	☐ ほとんどない	☐ 30分以下	
		☐ 30分～1時間	☐ 1時間～2時間	
		☐ 2時間以上		
	夫婦でお休みが合わない日	☐ ほとんどない	☐ 30分以下	
		☐ 30分～1時間	☐ 1時間～2時間	
		☐ 2時間以上		

3. 質問項目の参考文献

- ① フェイスシート
伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響——自己開示を中心に—— 文京学院大学人間学部研究紀要, 9 (1), 1-15.
岩尾侑充子・斎藤ひさ子 (2012). 妊娠期の夫婦関係に関連する要因 日本助産学会誌, 26 (1), 40-48.
- ② 夫婦関係満足尺度 (諸井, 1996)
諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における公平性の知覚 家族心理学研究, 10 (1), 15-30.
片山美由紀 (2001). 夫婦関係満足尺度 堀洋道 (監修) 吉田富二雄 (編) 心理測定尺度集Ⅱ——人間と社会のつながりをとらえるく対人関係・価値観——, サイエンス社, pp. 149-152.
- ③ 関係焦点型コーピング尺度17項目 (黒澤・加藤, 2013)
黒澤 泰・加藤 道代 (2013). 夫婦間ストレス場面における関係焦点型コーピング尺度作成の試み 発達心理学研究, 24 (1), 66-76.
- ④ ENDCOREs 24項目 (藤本・大坊, 2007)
藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15 (3), 347-361.